俳　句　雑　誌

水　明

２０２３　２月号

令和五年二月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十六巻第二号

《今月のかな女》

戀猫によくも寢落ちし吾家かな

（句集『龍膽』）

長谷川かな女

早春の二月は猫の恋のシーズンを迎える。現今は飼猫の避妊去勢手術などの対策によって、あの嫌な声を殆ど聞くことがなくなったが、本句の時代は連日連夜さぞかし悩まされたことであろう。石を投げても水をぶっかけても収まるものではなかったと思う。筆者も充分経験した。ある夜かな女宅の回りで奇声を発していた恋猫に、初めは苛立っていたものの、毎度のことで神経が図太くなり、程なく寝入ってしまったのである。

（鬼之介・註）

水　明

第1109号

―華の一句―

落葉掃く若き僧侶の目はブルー

小林京子

仏教を本格的に学ぶために、米国や欧州諸国から日本に移住し、禅寺などで修行している学僧が居るようで、作者が出会った僧侶もその中の一人であろう。毎日与えられた作務をきちっと履行し、読経や座禅などの修行に励んでいる。禅寺の境内で作者が出会った外国人の学僧の眼は地中海の海の色のように青く澄んでいて、心の動揺を抑えられなかったのであろう。

（鬼之介・推薦）

水明

令和５年
２　月号

今月のかな女　1
華の一句　山本鬼之介　4
矢音（作品）　星野和葉　6
舞扇（近詠）　栢尾さく子　7
日々雑念（近詠）　町野広子　8
風琴　※雪欄作家近詠鑑賞　井口俊晴　10
硯箱　※季音月評
季音「雪」（同人作品）　島津初花　田寺玲子　鈴木康世　ほか　12
季音「月」（同人作品）　正木萬蝶　井上燈女　梅澤佐江　ほか　19
季音「花」（同人作品）　河野はるみ　日髙道を　石田慶子　ほか　24
『水明誌』を繙く　栗林浩　29
現代俳句鑑賞　網野月を　30

「水明」年間作品回顧

明るき窓辺　石井　喜恵　34
拈華微笑　大橋　廸代　36
六　花　菊池ひろこ　38
随所作主　五明　昇　40
一陽来復　島津　初花　42
六華撩乱　星野和葉　44
年　輪　松宮保人　46
梅見月　柚木治子　48

水明集

新　暦文　梅澤　輝翠　ほか
池田珪子　50

水明集作品評　山本鬼之介　62
水　琴　窟（水明集十二月号鑑賞）　池田雅夫　66
山　紫　集　68
鼓　笛　集（同人作品）・私の一句　74
俳　誌　望　見　梅澤佐江　77
水明の記事他誌転載　32
水明例会報・各地句会報　81・84
若狭句碑めぐりバスツアーのお知らせ　89
新珠賞作品募集のお知らせ　92
水明忌・春の吟行会のお知らせ　93
風声・発展基金御礼　94
後記　96

題字：長谷川かな女　表紙：内田恵子　カット：福田千春

矢音

山本鬼之介

人間が神を演ずる里神楽

起きぬけに膝打つ一句初明り

股立や弓矢始の少女(をとめ)子(ご)よ

買初に「日比谷花壇」のばら五本

勤行は法華の太鼓寒びより

大寒や飛行機雲が斬り結ぶ

天井を鏡の光日脚伸ぶ

麦の芽に遠き約束よみがへる

舞扇

星野和葉

衣擦れの音孔雀舞ふ大襖

前菜の袱紗卵や実千両

乾杯につづき熱燗天井画

椀占むる蕪良茶布にべつかふ餡

篠笛の冴ゆる響きや舞扇

金太郎と山姥の悲話冬を舞ふ

舞人の指の先まで灯の冴ゆる

友人に誘われて踊りの会に参加した。会場であるホテルは歴史ある建物で、内部も日本舞踊に相応しい重厚なつくりである。

華やかな舞台を想像していたのとは違い、会席料理を戴きながら踊りを拝見するという趣向であった。暗めの照明に篠笛の美しい流れ、その音色は心に沁みるものがあった。舞台脇にずらり並んだ蝋燭の灯の揺らぎに舞人の影も……。

息を詰めて見守る。何とも言えぬひとときを過ごさせて戴いた。

日々雑念

栢尾　さく子

飛べた日や走れた記憶残る虫

袴着に鷹の羽ある紋所

最果てに沈む日輪雪けむり

荒寥と大和国原冬に入る

酒がめか酢がめか迷ふ雪女郎

落日やもみぢ乾いた音で散る

むさし野で遊びぽっぺん吹いた頃

最近七十年以上も交流を持てなかった幼馴染と電話で交流ができた。お互いに直ぐタイムスリップして、彼女は私の家からの夜景を記憶していて「北の窓から雅叙園、東の窓からは五反田駅の灯が見えたね」と往事を懐かしんでいた。風に乗って聞こえてくる代々木練兵場の消灯ラッパの音は、なんだか泣きたかったね、と取留めもない。戦前の武蔵野の一隅に育った私達。志向も感性もよく似ていた。

風琴

◎季音雪欄作家近詠鑑賞

町野広子

◇白萩（十一月号）

矢作水尾

玻璃拭きて一気に秋を極めけり
秋茄子の紺きつぱりと水はじく

きれいに見えていた窓硝子を拭くと、スッキリ明るくなる「一気に」が、清々しさを引き寄せ、秋の空気感が伝わる。夏の代表野菜の茄子も「秋茄子」と名付けられる様に、味も色も増すのである。掲句も又「きつぱり」が茄子の色を、より鮮やかに表現。作者その人を見ている気がする。

白萩のこぼるる庭の薄明り
わが影の上に影ある木々九月
雲の色風の音にも秋立ちぬ

咲いても散っても絵になる萩の花。白萩に秋の庭の寂しさと尊厳を覚え、明け方の静寂が伝わる。二句目九月とはいえ残暑厳しい中を行く。己が影を隠す木々の影に気付き、生命の逞しさを感じる。日陰を選んで歩く当り前の「木々の影」に思いを廻らせた事に、改めて驚く。

ムクムクした積乱雲が、秋には湧いては消える雲になる。縞になったり、鱗のようになったり、空は高く澄み渡り、風も又西や西南から吹くようになる。枝葉を揺らす音や、身を過る風を秋の気配がする。大先輩の詩心に気付かされると共に、大いに学ばせて戴いた。

◇冬の七菜（十一月号）

網野月を

変なのと言はれ続けて姫キャベツ
白菜や痴呆の母は刈上げに

冬の七草ならぬ七菜である。姫キャベツは、芽キャベツの別称で、ミニトマト的な存在。小さくてもしっかりキャベツ上五中七にユーモアがあり、姫キャベツの存在感が強張されている。二句目認知症を患われて、施設に居られるのでしょうか。入浴等日常生活の中、対応し易い髪型が、総じて刈上げなのであろう。かつては、自慢の黒髪であったかも知れない。白菜の白さと白髪が重なり、寂しさと悲しさに溢れる。

ポパイには負けたくないぞ小松菜を

ポパイと言えば菠薐草。それに対抗しての小松菜は、ビタミン、鉄分、カルシウム豊富な冬野菜。元気の源の一句。

半分半分半分にして葱は白
春菊や綺麗に避ける老紳士

つまり四分の一に切った葱の下部分は白だけ。関東は白を関西は緑の部分を好む。月を俳句のウイットに接する。

老紳士はお父様であろうか。どうしても好きになれなかった春菊。嫌いを通し抜いたのである。他の二句共に、お父様との時を刻み、優しく心に残る「冬の七菜」である。

◇花芯に降る（十二月号）

柚木治子

天女彫る幾歳月や身に沁むる
山粧ふ命けづりて生れし像
飽かず仰ぐまごころの像秋袷

日本橋三越ホールの吹き抜けにその像は在る。福島県出身の佐藤玄々氏と、各地の仏師・宮彫師・画家・漆や截金の工芸家の手により九年の歳月を掛け昭和三十五年に完成。久々の外出で天女に会いに行く。天女像は懐深く、来る人を温かく迎え、心安らかに見守って下さる。歳月に思いを馳せ、しみじみ感動を味わう。何度でも何時間でも飽きない。この像には「まごころ」と命題が付いている。

栗羊羹のまことの風味知る齢

美しい天女像の七句のまん中に、ポンと息抜きのような掲句がある。子供の頃や若い頃には、和の甘い物より洋の物を好んでいた。しかし今、栗羊羹の深い味を知る「まことの風味」に、過ぎ来し年月をしみじみ思う。

爽籟や明眸つよき天女像

さわやかな秋風の響く季節。見上げる天女像は、澄みきった瞳と、はっきりした目もとの美人である。世を見通すその眸は人の心を捉えて離さない。難しい季語に相応しい一句。

様々な美術工芸に造詣が深い作者。それらに触れる事で、更に目と心が養われ、俳句にも繋がっているのであろう。

◇ひとり心地（十二月号）

小倉倭子

一片の詩想を描く秋の虹

長い句歴の中、いつしか普段の生活に、自然と五七五が組み込まれてしまっている。指を折らずとも、そのリズムは溢れ出す。虹を見た「一片の詩想」が素敵。

湯舟なか妹を想ふや天の川
林檎好き父と出会ふか善光寺
遥か来てひとり旅路の初紅葉

最近大切な妹さんを亡くされた作者。湯舟に浸り、妹とのあれこれを想い出す。コロナ禍で会う事も儘ならなかった今澄んだ夜空の天の川に想いを馳せる。

林檎が好きだった父。善光寺の人混みの中、ついつい目で捜してしまう。もう居るはずもない人なのに、肉身とはそう言う存在。折に触れ思い出すのである。胸に迫る二句。

一人旅に出た作者は、紅葉の美しさを静かに堪能する。ふと立ち止った時に「遠くへ来たなあ」と感慨にふける「妹と来たかったなあ」と思う事も。初紅葉に作者の心情が伝わる。

亡師の句銀杏黄葉に記す淡い

作者には、敬愛して止まなかった亡師居り、師の句をいくつも諳んじる事が出来る。黄金色となった銀杏の葉に、それを記してみる。栞として大切なそれは、美しくもはかない。

筆者にも以前、城子師に戴いた銀杏の栞がある。黄金色だった栞も茶色くなったが、想い出と共に大切な宝物である。

硯箱

◆季音十二月　井口俊晴

海峡を隔つおのころ鳥渡る　田寺玲子

神代の昔、伊弉諾（イザナギ）・伊弉冉（イザナミ）の男女二神は天沼矛（アメノヌボコ）で海をかき混ぜ、その雫がおのころ島になったと言われる。日本神話の国生みのハイライトである。おのころ島は淡路島の南の沼島にあり、その小高い山の上には、おのころ神社が建っており、パワースポットとして親しまれている。波が逆巻く、眼下の海峡を越え、渡り鳥がきょうも飛んで行く。

無住寺に人の気配や石榴割け　石井喜恵

住職が住んでいないため、ふだんは人の気配が全くない、そんな無住寺が増えている。実は近所にも無住寺があるのだが、不思議なことに、きょうは人の気配がするのだ。掛け持ちでお寺を回っているお坊さんが来たのか、それとも…。折から境内にある石榴の実がザックリと割け、真っ赤な粒がこぼれんばかりにのぞいている。あの鬼子母神の言い伝えを思い出すと、何やら首筋がゾクゾクしてくる。

熟れ柿の鮮紅映る切子皿　山田美佐尾

ちょっと硬めの柿も美味しいけれど、熟柿と呼ばれる柔らかめの柿の甘くて美味しいことと言ったらありはしない。青みがかった江戸切子の果物皿に載った柿は、今にも崩れそうになりながら、その丸みを保っている。スプーンですくって口に運ぶ時、切子の皿に差し込む照明が、柿の鮮紅色と重なって、それは美しく輝いて見える。

眼が合ひし菊人形は着替へ中　高島寛治

菊人形展に出かけたのは何年ぶりのことか。歴史や歌舞伎の名場面から題材を採ることが多いので、菊人形には英雄豪傑や絶世の美女が多い。その日は菊花の手入れを兼ねた着替えの真っ最中。楚楚としたお姫様が人形師の逞しい腕に抱か

れて…。そんな気は全くなかったのだが、ふと視線を向けたら、お姫様と目が合ってしまった。「嫌だわ、恥ずかしい」と言われたような気がしたのは何故だろう。

金木犀私やつぱり方向音痴　藤澤喜久

今いる場所が分からない、目的地にどうやって行けば良いのかは、もっと分からない。方向音痴の人は心細いことだろう。ここだけの話だが、私の妻なんかも呆れるほどの方向音痴である。それはともかく、作者は道に迷ってしまい、旅行ガイドに載っている店に行きたいと思っているのに、今やここが何処かさえ分からない。目的地でこっちこっちと言っているかのように、どこからか甘い金木犀の香が漂ってくる。女性に多い弱点だが、「私やつぱり方向音痴」と居直っているのが愉快である。

勢子三人倒して鹿の角切らる　森本早苗

奈良の秋の風物詩・鹿の角切り。江戸時代に始まった勇壮な行事だが、コロナ禍で開催が三年も見送られていた。十月の春日大社の角切り場には、鉢巻きに法被姿の勢子たちが、大きな角を振り立てる牡鹿を抑え込み、そこを神官が鋸で角を切り落とす。ただ鹿も剛の者、邪魔な勢子を三人もなぎ倒したという。喝采を浴びたのは勢子か牡鹿か。きっと鹿の方だろう。因みに、この時期の鹿の角は伸びた爪のようなもので、切っても出血しないし、痛くもないそうだ。

秋高しころころ笑ふ握り飯　石田慶子

天高く馬肥ゆる秋…。雲一つなく晴れた空の下、友人と郊外に出かければ、馬でなくたって、お腹が空いてくる。地面にビニールシートを敷き、おにぎりを頬張る。朝一番で新米を炊き、塩昆布や梅干しを入れた大きめのやつだ。手のひらでコロコロした感触を楽しみ、他愛ない噂話に笑い転げる。ところで「おむすび」は「おにぎり」の京言葉で、後で付いた呼び名だとか。つい先日のテレビ番組で知りました。

源氏名を呼び合ふ仲居秋の草　保坂翔太

「桔梗さーん、奥のお部屋にお茶を届けて」「尾花さーん、離れのご夫婦がお風呂ですって」。果たしてそう言ったかどうか。コロナ禍で元気がなかった旅館に、やっと活気が戻ってきた。GOTOトラベルなど、支援事業のお蔭もあるだろう。そこで忙しくなってくるのが仲居さんたち。やれ風呂だ、夕食だのと、この時間は目が回りそうだ。秋の七草に因んだ源氏名でせわしなく呼び合う様子が微笑ましい。

季音雪

冬陽　島津初花

バスの旅銀杏落葉の舞ふ街へ
明暗に怪人現はる師走街
エレベーター下りに等し秋の暮
大阪のビルの谷間に冬陽かな
フォグランプしぐるる街を行き帰り

虎落笛　鈴木康世

膝を抱き虎落笛聴くひとりの夜
虎落笛激しき夜の胸騒ぎ
峡の夜の肺腑を抉る虎落笛
虎落笛犬の遠吠え急きたつる
錆びつきし頭脳を覚ます虎落笛

冬の音

田寺玲子

短日のカウンターテナー嫋嫋と
短日の果つることなき工事音
婚の鐘小春の空に鳴り響く
息白く海明けはじむ糶の声
顔見世の五変化勤む愛之助

漱石忌

十倉和子

オルガンの調べやはらか山眠る
ボールペンは太字愛用漱石忌
その中の一人は赤シャツ漱石忌
正調の流るる駅舎冬ぬくし
底冷えに気迫ひしひし女子駅伝

限りなき

永野史代

トーストにバターしみ込む霜の朝
農協に花の鉢買ふ夫の立冬
人参丸囓り『にんじん』を読みながら
彩増やしつつ彼奴の毛糸編んでゐる
海に墜ちたる限りなき影十二月八日

数へ日

西山貴美子

縁石は砦のごとし暮の街
年の酒がくりと膝の笑ふまで
てのひらのぱつと明るきのつぺ汁
テープカットの鋏が金に冬落暉
夜上りの窓明るしや冬の鳩

佗助　波多野寿子

琴並び摺り足で入る冬座敷
夕映えや切絵のやうな実南天
すれ違ふ人足早に十二月
あくまでも青い空見る畳替
佗助や静かにはづす琴の爪

惜年　星野和葉

四半分を冬至南瓜の名で売らる
甘く煮て冬至南瓜と言ひ聞かす
存分に遊び惚けし日の柚湯
しみじみと語る白寿や年惜しむ
完全に厄を収むる年の暮

年流る　茂木和子

歳末の課題山積み室の花
すぐやる課デスクの上の冬薔薇
旅愁とも云ふ程でなし冬至風呂
かみごろしたき疫病の神や冬至粥
人も風も素通る銀座冬柳

石蕗の花　矢作水尾

その昔海といふ地の石蕗の花
枯芒研ぎ澄まされし富士を置く
里神楽泣くも笑ふも身を揺する
今も母ゐるかに障子里がへり
通過中の関東平野雪催

冬木立　山中みどり

日溜りに私語交し合ふ冬木立
修院は黙想の刻冬木立
口笛で呼ばれし記憶冬木立
冬木立すり抜けてゆくブーメラン
研ぎ澄ます五感冬木の中に居て

絹一枚　柚木治子

境内を食み出す屋台年の市
大根畑母呼ぶ声の透き通る
ラガーマンの気迫に茶の間沸きに沸く
絹一枚まとひて湯冷め知らずかな
乳液の残り香甘き湯ざめかな

なには津　由良ゆら女

「べつぴん」と糶場どよめく大鮪
なには津や秘伝の八つ目歩道まで
デパ地下に久に逢ひたる河豚の貌
人だかり何ぞ鮟鱇の吊るし切
老人にケトル笛吹く年の暮

冬鑑　網野月を

洗濯物に家族の揃ひ冬ぬくし
手の届くところに咲けり冬桜
底までの冷水(れいすい)なるや氷面鏡
長長と三尸窘め夜凍てる
冬あたたか馬頭観音顎をひく

深　爪

石井喜恵

深爪の微かな疼き毛糸編む
何処に転がつても丸い毛糸玉
指切りのその後は知らず皮手袋
人声の洩れくる畔鳥(ほとり)もぐる
聞き流すことも方便枯柳

縞木綿

石山かつ子

山の端に白を尽くして枯尾花
植林の山に日の射す冬芒
九十九里波が運びし勇魚かな
湯豆腐や古りてなじみし縞木綿
人生に筋立はなし花八手

ＰＫ戦

大橋廸代

ＰＫ戦寒夜の夫を揺り起こし
着ぶくれてＰＫ戦に固唾のむ
鶫ねらふスマホ吃逆止まらない
鉢退けて冬眠の蜘蛛おどろかす
懐妊のメール慇懃クリスマス

風の音

大村節代

顔見世や由緒正しきお弁当
銀座通りわづかに残る冬柳
葱引けば人体深く風の音
卑弥呼をば知る由もなき枯尾花
短日や地球いよいよ焦げ臭し

柔軟に生きむ　小倉倭子

湯豆腐や馬の合ふ人合はぬ人
着ぶくれて昔話を飽きもせず
風立ちて光線放つ枯芒
翁像の袖に縋るや枯尾花
柔軟にこの先生きむ枯尾花

開戦日　栢尾さく子

軒先に雀来てゐる一茶の忌
雪しんしん念入れて彫る嫗の面
膝小僧だいて寒さの底にゐる
曖昧な記憶持ち寄り日向ぼこ
桜華と云ふ文字みて泣けり開戦日

月蝕　菊池ひろこ

古障子に穴暗空（やみぞら）に天王星
月蝕を赤しと障子開け閉てす
眠る山置き鉄道の路線案
山眠るときの故郷の風の色
痕跡も標（しるし）も忘れ山眠る

冬日和　五明昇

富士に一礼篤農の打つ冬田かな
大利根の土を土産の大根買ふ
おでん屋の湯気が縁の俺お前
枇杷の花板戸に傾ぐ貸家札
川舟の笠に影置く冬柳

元祖を名乗る　境　延昭

枯柳元祖を名乗る洋食屋
射的場に湯ざめの顔が一つきり
おでん酒筋金入りの所轄でか
鍼灸院の引戸の鈴や枇杷の花
おでん鍋謀議なんぞは似合はない

山茶花　椎野　美代子

山茶花の垣根髪挿ほしくなる
黙食のランチ山茶花お喋りな
山茶花や笑ひ強ひらる笑佛
白山茶花気位もちし日本庭園
清貧の死語を思はば白山茶花

続・令和の新創刊
特集
「阿」「閏」「帯」「梶の葉」
「くぬぎ」「艸」「燕」「天晴」
「トイ」「となりあふ」「鳥」
「表情」「墨BOKU」「牧」
「実の会」「楽園」「わかば」

◎巻頭三句
大石悦子
山崎十生
佐藤文香
岡部榮一
山田貴世
若宮放我

◎俳句と短歌の10作競詠
橋本榮治
花山多佳子

◎今月の華
江見悦子
小島　健

好評連載
南　伸坊　ねこはい
筑紫磐井　俳壇観測
坂口昌弘　忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人　句の手触り、俳人の響き
大西　朋　俳句へのまなざし
神作研一　てのひらの江戸 ―古典籍を旅する
藤村公洋　俳句のつまみ
酒井佐忠　本の窓辺
二ノ宮一雄　一望百里

俳句四季 Haiku Shiki
2023年3月号
2月20日発売
定価1000円（税込）
http://www.tokyoshiki.co.jp/　東京四季出版
〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

父母の影　正木萬蝶

早産児の大器晩成鰤起し
切り張りの淡き色浮く冬障子
根深汁はにわの貌の夫とゐて
父母の影の濃淡白障子
文机や父母のその後を虎落笛

神々の恋　梅澤佐江

日の影の移ろふ静寂白障子
湯豆腐や嵯峨野いつしか暮れ初めし
夕映えの静けさ纏ひ鳰の笛
古伊万里に花びらのごと透くてつさ
神々の恋はおほらか里神楽

着ぶくれて　井上燈女

平凡といふ幸せを着ぶくれて
人疲れ買ひ疲れして年の市
芭蕉忌や美しき蜂まぎれ込む
折鶴の飛び出す小児病棟小春
年忘れとて己も酒をいただきぬ

平家琵琶　大場順子

筑波嶺にむらさきの帯冬霞
「卯波」ありし銀座に撓ふ枯柳
平家琵琶佳境に入るや虎落笛
日の香り潮の香りの蜜柑吸ふ
伊予なれや旅の無人の蜜柑買ふ

ゆるがぬ飛翔　丸山マスミ

吊るさるる塩引鮭の青光り
涸れ川や一縷の光蛇行せり
座敷童の立ち去る気配白障子
恐竜の跋扈せし渓夕霞
風捉へゆるがぬ飛翔蒼鷹（もろがへり）

松飾る　松井由紀子

冬の雨陽水が哭く「傘がない」
ざわめきの灯は川向う枯柳
息白く喪中欠礼投函す
修羅の空翔り来て水鳥しづか
住み馴れし此処がふるさと松飾る

虎落笛　藤澤喜久

サーカスの幌の隙間や虎落笛
落人にまつはる謂れ虎落笛
惨敗の選挙戦ビラ虎落笛
サハリンに日本語滅ぶ虎落笛
どつぷりと炬燵に嵌り「若菜集」

野水仙　松宮保人

冬紅葉喫茶去に観る禅の庭
落武者の古道隠せし枯尾花
彼方此方と男寄り来る夜鳴蕎麦
断崖の上とも知らず野水仙
水仙の一輪匂ふミニ画廊

山眠る　井上玲子

懐にせせらぎ抱へ山眠る
湿原の遥かに池塘冬霞
遠望にけぶる秩父嶺雪催
しんしんと身を抜く寒さ雪催
柚湯して明日への気力育めり

夕茜　森川義子

筋塀に絡む枯蔦夕茜
遠富士の銀びかり枯芒
一条の光きらめく冬の川
みちのくの海の暗さよ雪催
餅搗や入るる相の手里訛

散紅葉　森本早苗

黙考の鷺飛び立ちぬ小春空
散紅葉地蔵百体赤被く
散もみぢ存外広き獣道
木守柿意地を張り合ふ過疎の町
極月のエムワン王者涙美し

冬の山　宇田白鷺

冬薔薇の二輪は紅き中山寺
紅葉狩散り敷く今日の永源寺
霰来て透き通りたる紅き実よ
様々の命眠らせ冬の山
鯖鮓の味まろやかに年の暮

龍の鱗　池田雅夫

初晴やこんなに近き富士の山
三ヶ日一升瓶の添ひ寝とは
身に沁みて小寒の陽を仰ぐなり
小正月本音ちらりと漏らしける
地吹雪が龍の鱗を置いてゆく

鷹の舞　高島寛治

冬霞上げ潮温き河口かな
鷹舞へり朝市賑はふ港町
縦に撮る快晴富士と鷹の舞
旧友の安否気遣ふ年の内
お駄賃はポッケ膨らむ蜜柑かな

正月　鳥羽和風

ちやんちやんこ肘で刺し込む畳針
里の名を頭に富士の初明り
初春の風に遊ぶや日章旗
木洩れ日がスポットライト福寿草
水仙に風のよぢれる岬かな

京都　山田美佐尾

南座の世話物に泣く雪催
漬物を錦市場で雪催
拝観料の嵩む京都の雪催
セーターの袖口光る餓鬼大将
ビル街のガラスに映る冬夕焼

毛糸帽　町野広子

綿虫や打ち明けぬまま終へし恋
米寿越ゆ姉へ毛糸の帽子編む
ポンポン付けて毛糸帽編み終る
和洋中にんじんは国を選ばず
星型の人参を添へカレー辛口

冬霞　内田恵子

野生馬の駆くる山裾冬霞
車椅子に小さき羽生ゆクリスマス
ふはふはの大きオムレツ冬至の夜
冬柳キッチンカーのスパゲッティ
電飾の街のざわめき寒昴

おでん　井口俊晴

真相はおでんの湯気のむかう側
コンビニのおでんぶら下げ午前さま
大根は美脚ぞろひよ道の駅
木枯や仁王の脛を吹き抜くる
陽の当たる障子の桟に塵少し

夕陽　荒井倶子

冬の田へ少年が吹くトランペット
峡の村うすびに匂ふ懸け大根
尖り来る風にやつれし懸け大根
夕雲の縁の茜や枇杷の花
枇杷の花夕陽すとんと落ちにけり

葱鉄砲　福田千春

闇汁や怖ごは食す柔きもの
油断して葱鉄砲や根深汁
早退の子の眼うるむや玉子酒
障子の穴に見ゆる景色花の秘密めき
映画館咳（しはぶき）やまず如何せむ

かもじ屋　松本光子

畳屋の三和土明かるし石蕗の花
妻病めばなぐさめ色に石蕗濃ゆき
かもじ屋に簪きらり石蕗の花
赤れんが囲はれ石蕗の花数へ
走りそば打つ夫の顔にひかるもの

山眠る　川崎道子

千本の鳥居を抱き山眠る
朝練のスパイクぶすぶす落葉道
大冬木一番星が引つかかる
吊り干しの鱆からから冬日和
ラグビーの対戦国を探す地図

年暮るる　井関礼子

息白し峡に住みしも半世紀
篭り癖付きたるままに早師走
着膨れて厨に篭り気の重し
年の瀬や町騒遠き峡に住み
疫病のはびこりしまま年暮るる

冬のチューリップ　渡辺舎人

日向ぼこり蜂蜜飴のひとときよ
勘違ひし長生の冬鬱金香
教会へポインセチアの導き置き
「主よ人の望みの歓びよ」聖夜ミサ
寒気来る臼歯の穴を舐めづれば

石蕗の花　上戸千津子

誰待つや首長くして石蕗の花
湯豆腐や外凄まじき風の音
帰路急くや木の葉時雨に追はれつつ
枯蔦のなよやかにして強さあり
熱燗やそろそろ友の見ゆる頃

湯葉懐石　野口和子

湯葉懐石隠れ家めきし冬木立
初霜や太陽発電発光す
干し柿に甘くなれよと空つ風
マニキュアのかすれ師走の手となりし
幸せも不幸も糧に山眠る

山茶花　西浦千枝子

もぎたての柿稚の頬つぺに似てゐたり
山茶花散り朝の仕事の一つ増ゆ
パラグライダー枯野を蹴つて川越えて
大邸宅に小型車並ぶ年の暮
一軒家に人多く寄るクリスマス

霜柱　松山清子

公園の兎を抱くや冬ぬくし
冬うらら兎寄り来てたぢたぢす
勤行の木魚の音や落葉降る
落葉掻焚けぬ時世にとまどひて
バスを待つ子の踏みしむる霜柱

季音花

神神へのうた　河野はるみ

冬うらら小径にあそぶ五七五
用を足す鬼神子供里神楽
剣の舞暗夜に光る里神楽
島のミサ終へわらはべの手に聖菓
クリスマス小さきケーキで独り酒

十二月を生く　石田慶子

奥の間や作家の苦悩知る障子
日記買ひ赤丸つける早生まれ
バラライカ流るる店の狸汁
前かごに鯛焼ふたつペダル踏む
行列のパン屋のトング冬ぬくし

里山の冬　日高道を

藁を編む嫗の背中山眠る
静寂が時間を止むる冬木道
杣小屋に煙一条十二月
秩父路に暮色はやばや雪螢
山眠る峡のいで湯の渾渾と

山眠る　青木鶴城

缶蹴りの缶の高鳴り冬木立
クリスマス天地無用の宅配便
掘炬燵ところ狭しと膝頭
ＡＩの幾何の解析冬の星
山眠るひととせ包み込む如く

雑炊　大塚茂子

冬ぬくし母となる胸かがやけり
産み月の子に雑炊や母の味
雑炊や塩梅の良き夫の味
接岸の杭をかこみて浮寝鳥
登り来る子等の声聴く冬ざくら

五黄のとら　近藤徹平

大晦日千里を還る五黄のとら
婆語る姨捨民話囲炉裏端
仁王尊の上腕筋や冬の蝶
湯豆腐や叩けど堅き鰹節
無人駅一升瓶の枯尾花

五年日記　曲淵徹雄

出囃子にのるごと登場雪ばんば
窯変を兆す炎や冬の雷
骨に鬆の入る年頃虎落笛
えいと買ふ五年日記の重さかな
極月や禁帯出の辞書の棚

広小路　保坂翔太

円窓の古刹の広間照紅葉
文化の日江戸の脈打つ広小路
知らぬ同士が弾む角打ち夕時雨
海境の島へ客船冬の虹
古民家は冬の日のいろ柿落葉

荒星　野田静香

人影の重なる谷中冬夕焼
冬の川足音だけの太鼓橋
夕暮の風のアカペラ滝涸るる
神木の鳩の見守る札納
荒星や友に背を押さるるやうに

冬の庭　笹本啓子

冬の庭松の走り根くつきりと
踏み入れば風音のみや冬木立
冬晴や庭で水張る臼に杵
行く年や断捨離出来ぬ物数多
年惜しみ迎へ酒して酔ひ醒ます

柚子湯　石川理恵

「火の用心」の幟はためく枯野かな
恐ろしく切れる包丁葱刻む
我が脚に触るる足あり掘炬燵
黙々と冬至南瓜を煮てひとり
取り立てて何も無き日の柚子湯かな

炉火　原田秀子

年の市スマホに余念なき店主
あの頃はみな痩せつぽち芋雑炊
炉明りやぜんまい時計動き出す
炉火赫し心温もる友もゐて
埋火やそろそろ寝間に戻る刻

初時雨　檜鼻ことは

冬めくや馴染みの店の隅の席
切れさうで切れぬ電球初時雨
焼薯や幸せさうにもがく指
柊の花ちりぢりに散り散りに
半日を床屋で過ごす小六月

寒き朝　葛城千世子

見送りて立ち話する日向ぼこ
閉め出され呼ぶは鍵屋ぞ寒き朝
冬滝の水さかしまに舞ひ上がる
訃報電話に言葉失ふ冬座敷
フロントの視界遮る猛吹雪

冬景色　飛永鼓

モスリンの母の面影山紅葉
けだものの臭き辺りや冬景色
乗換へて車窓眺むる冬景色
濡れねずみの農婦見詰むる水仙花
捨てられぬ反古積み上げて年を越す

冬夕焼　宮﨑チアキ

懐に獣も抱き山眠る
風神の手持無沙汰や冬紅葉
かいつむり寄り添ふ水脈の静かなり
剥き出しの幹に冬の日落羽松
街並をわたる梵鐘冬夕焼

大根　熊倉千重子

侘助や奥に古風な佇ひ
不器量な柚子と遊びつ仕舞風呂
肩を出し半身浴の畑大根
こはく色に煮込む大根よ外は雨
煮大根女将の白き割烹着

冬の海　中野　彊

床の間に活けてふくらむ実南天
美しき日の出呼び出す冬の海
かまぼこ屋寄りて快晴冬の海
庭の奥椿の朱色胸の灯に
鯛焼の整列すれば開店す

うさぎうさぎ　下川光子

白銀の兎の跡を風さらふ
煌々と兎を守る冬の月
かたまつて兎は隅にクリスマス
校舎より聖歌うさぎの耳動く
大柄な兎現る里神楽

葷酒許さぬ　松島寛久

ドレミーレド星も一杯夜鳴蕎麦
クラス替へ気になる瞳秋うらら
初東風を子ら顔面に浜かくる
ことわりも無く笑顔先立つ朴落葉
山門の葷酒許さぬ桐一葉

浦和別所沼　瀬戸雄二郎

賞取りし菊も枯れては焚かれけり
メタセコイア枯れて昔の別所沼
枯れ蓮戦に勝者などをらぬ
インターホン聞こえぬ振りの炬燵かな
みんな出て二人きりの炬燵かな

冬晴　野平美紗子

冬晴やまづ見定むる富士の山
冬晴やジェット追ひゆく音響く
年の瀬や乗客席を譲り合ふ
里の家住む人のなく枯園に
白鳥や首しなやかに折りたたむ

年の暮　田中章嘉

飴切の納め大師や運定め
寒鯉の捌かれ板に肝置かる
アメ横に人涌くやうな師走かな
早咲きの蝋梅一花勇み足
鋤鍬の光戻りし年の暮

冬すみれ　後藤綾子

海に入る夕日煌めく冬はじめ
城下町古き軒並初時雨
曳き売りの声美しや石焼藷
街騒の戻りし銀座冬すみれ
灯を消して落葉時雨の音を聞く

咳　宮崎紫水

登校の列一休み焚火あり
授業中ちらほら水洟すする音
悴みの解けて鉛筆回しけり
校庭に遊ぶ子戻り息白し
大難問咳一つして答ふる子

☆　☆

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2023年3月号

特集 生誕110年 石田波郷の世界
○波郷50句セレクション　鈴木しげを
○論考～石田波郷の魅力　青木亮人
○論考～波郷の生涯　徳田千鶴子
○一句鑑賞　亀井雉子男　佐藤郁良　依田善朗　岸本尚毅　西村麒麟　小野あらた

〈グラビア〉俳句界NOW　島村正

特別作品21句　名和未知男

特集 一句の背景～秘められたエピソード
細見綾子…田島和生　林翔…辻美奈子
桂信子…吉田成子　佐藤鬼房…高野ムツオ　津田清子…名村早智子　三橋敏雄…遠山陽子　山上樹実雄…村上鞆彦　伊藤通明…柴田佐知子　田中裕明…森賀まり
○自句自解　小川軽舟　上田日差子　鈴木直充　井上弘美

※セレクション結社　「春嶺」古澤宜友

私の一冊　鈴木久美子「山火」

対談　佐高信の甘口でコンニチハ！　岸本聡子（杉並区長）

「俳句界」投稿欄　一流選者14名！日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性があります。

株式会社 文學の森　お求めは…●〒169-0075　東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL http://www.bungak.com

『水明誌』を繙く（水明十二月号）

栗林　浩（円錐、小熊座、街、遊牧）

駅の名に魅かれて途中下車の秋　檜鼻ことは

平明で同感の句である。誰もがこんなことを試みたか、あるいはそうしたいと思ったことがあるに違いない。檜鼻さんがどこの何という駅に魅かれたのかは書かれていない。今までに降りたことがない駅であろう。その駅およびその町の何が有名なのかは知らないはず。ただその名前が、あるいは一見した線路際の佇まいが何かを呼び起こし、降りて歩いてみたいと思ったのである。それに下五の最後の「秋」がぴったり。色んな情感を呼び起こさせてくれる。

ところで何処の駅なのだろうか。私の場合は北海道で育ったせいか、ＪＲ室蘭本線の「母恋駅」。いい響きでしょう。

それから、これは全国的に有名で、いまは廃線になった広尾線の「幸福駅」。最近では、奈良県の万葉まほろば線（桜井線）の「京終」「帯解」も響きがいいですね。山の辺の道を歩くとき、なんども桜井まで乗りましたが、まだ一度も降りていません。いつかその先の「香久山」「畝傍」などにも降りたいものです。檜鼻さんが実際に途中下車された、その心の余裕に感銘を戴きました。私もそこに降りてみたい。

月光を待たせてをりぬ山の駅　古池恵里子

この句も明快。「月光を待たせ」とあるが、月が沈むのを気にして急いでいるのであろう。月を待たせることなどはできる訳はない。しかし、平清盛が沈みそうな太陽を扇で引き戻した、とその権勢の様を大げさに伝えているように、俳句なら、月を待たせることくらいは簡単に出来る。少なくとも、古池さんのその時の気持ちでは、出来たのである。

「山の駅」と呼ばれるところは、全国に沢山あるようだが、多くは観光・商業施設であるようだ。この句の場合は、もっと自然の豊かな見晴らしのきくケーブルカーやゴンドラの駅であろう。私には琵琶湖側（坂本）から比叡山へ登ったケーブルが懐かしい。まさに山の駅の雰囲気で、駅員が勤務の合間に山の小鳥の餌付けをしていた。月を楽しめる時間帯ではなかったが、想像は出来る。

俳句の解釈は正解を言い当てることではない。先の〈途中下車〉の句もそうだが、読者に思い当る場所や時機を思い起こさせ、記憶の広がりを招来せしめることができる句が、良い句の要諦なのであろう。楽しい句でした。

現代俳句鑑賞

網野月を

青田原走つて来る子手が翼　神田ひろみ

（『俳句四季』12月号・梨にいまより）

何と伸びやかな句であろうか。句の主人公は「走ってくる子」であるし、その様は「手が翼」になっている。そしてシチュエーションは「青田原」なのである。どのアイテムも相互にハーモニーを創り出していて、千年を堪える石積みのギリシャ建築のようだ。他に「梨にいま蒼々と海の引力」「粉雪にいちにちとまる読めない字」がある。

ひとすぢの枯色通る草氷柱　西山　睦

（『俳句四季』12月号・駒草より）

思いの詰まった句である。俳句結社「駒草」を紹介するページに主宰句として掲出されている句であるから至極当然であろう。力不足の筆者にはその思いの全てに迫ることは出来ないが、作者の決意と結社の自負、そして謙譲の心を読み取ることが出来る。「駒草」を創刊した阿部みどり女は、長谷川かな女とは姉妹の様に親しい関係であったと作者から伺ったことがある。決意と自負、謙譲を肝に銘じます。

放たれし亀の瞬く花筏　古川佳子

（『俳句四季』12月号・侍従川より）

嘗て放生会で放たれた亀ででもあろうか。「侍従川」であるから、人の手から「放たれ」たというくらいの意であろうか。そこは分からない。ただ景をフォーカスすれば「花筏」の重畳に「瞬く」亀の驚愕した様がはっきりと思い浮かぶ。他に「流れゆく花弁不動の亀と鷺」がある。

名案もなし冬草を歩く歩く　藺草慶子

（『俳句』12月号・雪の日より）

磨き上げた端正な句の姿が印象的である。作者の場合、不思議なことに句の形が磨き上げられると同様に句意の清らかさや滑らかさまでもが同調して行くのだ。もしかしたら逆の相乗効果なのかも知れない。作者の想像の過程を知らない筆者には、計り知れないところである。

ある俳句の墨書展で作者の色紙を拝見したことがある。その筆跡は作者その人のように感じた。他に「ゆふがほのひらくや月のにほひして」「雪の日の溲瓶にいのち響きけり」がある。

煮凝の目玉の動き婆娑羅の忌　山﨑十生

（『俳句』12月号・婆娑羅忌より）

「婆娑羅忌」は十一月十七日である。俳人関口比良男の忌である。一九九八年に九十歳の天寿を全うされた。作者は、その師の後を継いで「紫」の主宰を務めている。弟子の師に対する敬愛と親身、そして喜びに溢れている。師弟の情愛には何人たりとも入ることは叶わない。他に「婆娑羅忌のあと憂国忌開戦忌」「式部の実割愛などは許せざる」がある。

霧のなか霧にならねば息できず　堀田季何

（『俳句界』12月号・自選30句より）

読み手の多様な鑑賞によって、多様な意味づけが可能な句である。「……ねば……できず」に拠って、社会の中の息苦しさと解する一方で、人間の強かさにも気づかされる。また読者の思考は人間の柔軟さや人間界の因襲や流動性にも思い至るであろう。作者の懐の深さに感歎するばかりである。他に「水晶の夜映写機は砕けたか」「人間を乗り継いでゆく神の旅」がある。

青空の奥も青空赤とんぼ　山崎聰

（『俳句界』12月号・90代俳人競詠より）

秋の午後の景であろう。「青空」の美しさ、「青空」を観ることの心の安らぎ、「奥も青空」を発見したことの喜びと、そうであって欲しいという願望、俳句という想像世界には表現できないことは無いのだ、ということの証となる一句である。他に「落柿に赤いところも村はずれ」「虫の夜あいついまごろどうしてる」がある。

温暖化眠らぬ熊に麻酔銃　清水逍径

（『現代俳句カレンダー2022』・12月より）

「温暖化」の悲哀を諧謔と現実の中に封じ込めたような作品である。一つの感傷に貫かれているのではなくて、中七座五の「眠らぬ熊に麻酔」という作者独特のヒネリを垣間見せつつ、一辺倒な視点ではなく複層的な表現に拠って、「温暖化」のまさしく複雑な側面も描き出している。これは作者ご自身の「熊」に対する感情の多質性を物語っている。一つの主張に貫かれた俳句は読み手の心にストレートに入り込んでいくのだが、この句は、毎日毎日朝夕筆者の目に触れて、「麻酔銃」という作者の優しさに気付くところまで来ている。

あぢさゐやまだ終はらない隠れんぼう　石井洽星

（句集『アトリエ』より）

藤田直子氏の句集の序に「お会いした洽星さんはエレガントな装いで上品な物腰、……席につくと背筋を伸ばし、……その姿から、学問に飢えて学舎にやって来た女子学生のような印象を受けた」とある。収録されている句の大半が、背筋を伸ばしているし、真を探求する姿勢に貫かれている。一方で、創作の世界は作者の純粋無垢な本質が体現している。中七の「終はらない」は、そうした自己を活写している。他に「鞦韆やガラスの靴を履きしまま」がある。

俳誌望見

梅澤佐江

「若葉」　令和四年一二月（終刊号）　通巻一一一八号
主宰　鈴木貞雄　発行所　東京都世田谷区

昭和三年五月、富安風生が東京で創刊。師系富安風生、清崎俊郎。自然・己れ・言葉・俳句の詩型に真実であること。（月刊）

主宰吟「白鳳仏」一三句より

仄々と帚木紅葉しづかな炎（ほ）
雨のなか百艘明し釣船草
悲恋譚のこれる池に夫婦鴨
花紫咲けば恋しき白鳳仏
榻（しじ）に坐し夢みる仏水の秋

一句目、深大寺参道沿いには、ほんのりと紅葉して静かに燃え出した炎の様な帚木が秋の到来を告げていた。二句目、折悪しく雨となったが、木立の影には、吊り下げられた帆掛け船の様な形の釣船草の赤紫色の花が、雨に濡れて鮮やかに艶を増し、百艘は有ると思える程咲き乱れていて思わず放心する。三句目、開山縁起の恋物語に思いを馳せると古代のロマンを感じる。謂れのある池に目を遣ると、番の鴨が穏やかに水尾を引いている。四句目、白鳳仏は深大寺釈迦如来像で、飛鳥時代後期（白鳳期）を代表する仏像である。以来、釣船草の紫の花が咲くと、穏やかな微笑みを堪えた彼の白鳳仏を想起し、慕わしく心惹かれる作者である。五句目、微笑みを絶やさず、台座に倚坐し、深大寺開創以来一三〇〇年、更に悠久の安寧の夢を見続けている白鳳仏。水の清らかな秋である。

若葉集（同人）主宰選　二九四名

永遠は師弟の絆銀河濃し　山本爽子
炎天下貨車放たるる鉄臭し　五反田秋夫
みづくきの余白涼しく句碑生るる　高村恵美子
山下りてまたも山恋ふ雲の峰　柳橋美代子
夢と咲く蓮華升麻の花の色　山口ひろし

新緑集　主宰選　三二〇名

星涼し手放してゆく母のもの　根本絢子
風簷（ふうえん）に筆を終はりて天高し　小川智史
水の星に住みて滴る西瓜喰ふ　春藤千恵
妻の忌を修す名付けて白薔薇忌　志村靖雄
ロボットに掃除まかせて胡瓜切る　西岡博子

終刊に際して、『俳句によるアルバム――私の一句――、「若葉に在籍する会員のとっておきの一句・思い出の一句（五四六名投句）」「主宰の一句　合掌す出会ひと別れすずしかり』

昭和三年創刊以来九四年間継いで来られた俳誌「若葉」、終刊号の一一一八号を拝読させて頂き、結社の皆様の断腸の思いが心に突き刺さりました。皆様におかれましては、組織や形が変わっても、表現する楽しみと俳縁を大切に末永くご健吟下さいます様、句友の一人として切望して止みません。

令和４年

年　間　作　品　回　顧

期間

令和４年１月号
～令和４年12月号

明るき窓辺

石井喜恵

七十年来とは幼い頃からの友達でしょうか。共に元気で新しい年を迎える事ができた。電話での弾む会話が聞えてきそう。密やかに燃やすとは如何なる手紙なのでしょうか。誰にも身に覚えがありそうな、だって春立つ日ですもの。

卒寿今を謝して高きに登りけり
登高の道連れ夫の写真なる
捨てられぬ夢一つ持ち登高す

きっと若い頃から山登りのお好きな作者なのでしょう。九十歳を祝って元気に山登りとは何て素晴しい。写真の中の主人もあの時は一緒に登ったのに…。まだまだ私は元気よ、これからも果たさねばならない夢があるのだから。

網野月を

失くさないように買はない手袋も
夕桜両手で包む燐寸の火

買はないと云いつつも本当は買いたい、欲しいのである。失くすのを承知で作者が手に入れたい物とは、一体何なのであろうか。心惹かれる一句です。二句目、燐寸に火を付ける人と、両手でその火を包む人と二人がいる情景。夕桜が何となくミステリアスな関係を暗示する。

特撮で壊れたビルや晩夏光
秋晴や「春夏冬中」といふ看板

特撮、所謂トリック撮影などで壊れたビルを写す。強烈な

大橋廸代

庄屋の柿へ鬨の声あぐ群鴉
差向ひあといくたびを薺粥

見事に実った柿を狙って鴉がやってくる。あの耳障りな声はそうか、鬨の声であったか。では煩いのも我慢するか、作者のそんな気持を想像してみる。お互い歳を重ねてくると、労り合い共に暮せる日々を慈しむ。何時迄もこの幸せを。

松の花長押にさびぬ三つ道具
ひたと止むダム放水の二重虹

長押に三つ道具（突棒（つくぼう）、刺又（さすまた）、袖搦（そでがらみ））があるとは、由緒ある家柄なのでしょう。松の花の季語が重厚に働いている。黒部ダムの放水を眺めていた時、筆者も虹を見た事がある。ひたと止むとは見事な表現。その時の虹は二重であったとか。

鈴木康世

七十余年の友の声なる初電話
密やかに燃やす文あり春立つ日

夏の光は時に残酷さを感じさせる。しかし特撮などではなく、実際に世界の国にある実景なのだ。作者の悲憤を思う。

四季の内秋が無い。秋無い中、「商い中」なのですね。抽出しの多い作者。こんなユーモアも俳句にしてしまう。

井上燈女

朝日受け細る氷柱の水の息
春耕や嫁と言はれて田に老いて

氷柱の滴り落ちるさまを水の息と捉えた繊細な感覚が詩情のある一句となった。働き者の嫁として一家を支えて来た。この生涯に悔いはない。作者の確たる矜恃を見た。

夕焼を乗せ空つぽのロープウェー
衿ゆるく着て七夕の宵鏡

山登り用のロープウェーでしょうか。昼間は大勢の人を乗せて往き来していたのに、夕方ともなると閑散としている。夕焼を乗せてで大きな景が見えてくる。浴衣でしょうか。衿ゆるく着て鏡の前に立つ。何とも艶っぽい姿が目に泛ぶ。

井口俊晴

イケメンがいない里ねと雪女
草笛の鳴る子鳴らぬ子帰る道

雪女とは幻想的な美しい呼び名で美女を思い浮かべる。だが、もとは妖怪である。イケメン所望とは心得違いと言うものでしょう。

遊び疲れての帰り道、草笛の上手な子、吹けない子も皆仲良し。畦道でよく見掛けた郷愁溢れる風景だ。

巴里祭や銀座和光で待ち合はせ
新走り酔うていつものお説教

高級な品揃えで有名な銀座和光で待合せ。「巴里祭」の季語の斡旋が効いている。大方の人は酔うと饒舌になる。例によっていつものお説教が始まった。でもまあ成程、それも一理ある。作者の達観した笑顔が見えるようだ。

原田秀子

軒氷柱幽かに人の気配して
はやばやと土手をうづめて花火莫蓙

軒の氷柱が朝日を浴びて少しずつ溶け出す。その滴りにふと、人の気配を感じる。澄んだ空気と静寂の中にいる作者。毎年楽しみにしている花火大会、少しでも良い場所で見たいと思うことは皆同じ。それにしてもと当惑顔の作者。

熊野筆かるく紅刷く敬老日
「百薬」と宣ふ夫の温め酒

幕末の頃より作られている熊野筆。敬老日の今日この歴史ある紅筆で装ってみた。作者の心意気を感じる。「酒は百薬の長」ほどほどに嗜む程度にして元気でいて下さいね。夫を労る優しい一句となった。

拈華微笑

大橋廸代

椎野美代子

夏痩せの貝殻骨に翅のおと
マダームと呼び止めらるるラ・フランス
白桃や一糸まとはぬヴィーナス像

「翅のおと」のひらがな表記に意志あり。「マダーム」が意表を突く。桃とヴィーナス像の取合せは絶妙。

酌むよりは呷るがよろし濁り酒
破れ蓮やぶれかぶれの命かな

酒好きには堪らない渋みと酸味のどぶろく。破れ蓮は人の一生に通じる。連作と力量の妙味は一段と冴えを見せる。

菊池ひろこ

人心を得がたき降嫁冬椿
手をかざす一期一会の榾明かり
楽譜類積み上げてある若葉の窓

雪中の椿は降嫁の試練を暗示。榾の炎は人を呼び旧知の如く話が弾む。「若葉の窓」の笑い声と風が心地よい。

落鮎の流れに雲の影くだけ
前世の記憶ありあり花野道

落鮎の哀れと季節の寂しさを「雲の影くだけ」と見事。「前世の記憶ありあり」は精鋭な頭脳で物した心象の風景。

石井喜恵

夜を来て苫屋にほどく露の髪
編席につまづく齢花八ツ手

「露の髪」が艶かしい。「編席につまづく齢」に照れる顔が見え「大丈夫?」と受け止めてくれる花八ツ手。

厨より背伸びして見る初日の出
木菟や風に溶けゆく櫂の音
無住寺に人の気配や石榴割け

初日の差す厨の幸せ「風に溶けゆく」の表出は抜群。石榴が人を呼び鬼子母神の右手に持ったざくろの赤に呼応する。

宇田白鷺

根榾燃ゆこきりこ舞の賑やかし
雪起し一夜に描く墨絵かな
足早に行く雲水や春立ちぬ

根榾が爆ぜ、編木（びんざさら）の音と軽妙な踊りが楽しい。雪の到来を告げる雷鳴に黒衣を翻しゆく雲水は静謐な一幅の山水画。

畠の木に囮かけたる少年期
静けさや水の底まで秋の空

囮籠をかけ小鳥を待つ冒険心盛んな少年期。水底の秋の空は心の澄みきったお人柄と拝察。半年振りの作品に感銘です。

井上玲子

ゆくりなく時雨に出会ふ渡月橋
しみじみと並ぶ卵塔冬日差

白い雨脚を引いて嵐山を通りすぎる時雨は旅の風情を一層高める。ひえびえと苔むした禅僧の卵塔に柔らかい冬日差。

卒寿まで生きて春着の裾捌き
岩肌は柱状節理秋の山
杣の音響き渡るや秋の山

裾捌きは美しくお健やかな証。マグマの生んだ柱状節理の岩山も木を伐る山もそれぞれに秋の粧いをみせおもしろい。季音賞おめでとうございます。

保坂翔太

鞭声のかすかに聞こゆ霧の中
鮨詰めの出雲の宿舎神の旅

走り、飛び、髪をぬらす霧の深さが分る。出雲に集う八百万の神が地酒に酔い、愚痴話をしそうな諧謔味を覚える。

集落と集落つなぐ遠蛙
出目金の三千世界鉢の中
大袈裟に泣く児宥むる案山子かな

遠蛙と案山子は残しておきたい風景。金魚鉢を三千世界とは哀憐の情あふれ人生の悲哀にも通じる。水明賞おめでとう。

六　花

菊池ひろこ

永野史代

胸底に棲む人多し冬銀河
冬の虹消ゆればやがて父の忌が
裏口は日暮れの匂ひ枇杷の花

胸底に棲む亡き人々。それと呼応する冬銀河の取り合せが胸に沁みる。冬の虹が消えた天には父上が。繊細な情感に打たれる。「日暮れの匂ひ」からは家庭生活の幸福感が見える。

寒ゆるぶ座敷わらしの居はす蔵
足枷の名残りか春野のアンクレット

座敷わらしへの「居はす」で、それを魑魅魍魎よりも神に近いものに感じていることが分かる。足首にアンクレットをつけた女性。「足枷」の名残かと感じた醒めた視線が面白い。

山中みどり

浅草や鰭酒に擦る箱マッチ
桜餅抱へ桜橋渡りたり

鰭酒に入れる河豚や鯛の鰭を焼き焦がすのに、箱マッチを使っていることを見逃さなかった作者。隅田川唯一の歩行者専用の桜橋、桜餅を抱えて渡っていることは作者のみ知る。

梅雨の川舫ひ結びの屋形船
大甕の青空をゆく緋の目高
此処だけの話秋扇閉ぢ開き

梅雨の川の水嵩、車の積荷の如く固定された屋形船、情緒ある景色。目高を大甕に映る青空に置いた好句。内緒話の人たち、「秋扇の閉ぢ開き」という言葉での表現に瞠目した。

十倉和子

凩小僧夜つぴて星をかき鳴らす
貝寄風の四天王寺に亀つどふ
若駒に丸太刳り抜く水呑場

「星をかき鳴らす」は「夜つぴて」で一層共感できる。打ち寄せた貝の造花を四天王寺に献じた「貝寄風」の語、集ったのは亀、おだやかな光景にユーモアも。刳り抜いて水を貯めた丸太を若駒のためと見た作者の目もやさしい。

麦笛の雅楽に笑まふ道祖神
弦締めて十六夜の月待つばかり

雅楽に似て音域は広くない麦笛。聴衆は道祖神と見た機知の見える句。弦の締めに出したお琴はすでに手元に。月の出

が遅くなる十六夜、「待つ」ことに風情が感じられる。

丸山マスミ

縫初や今も健在糸切歯
お白酒いつしか弾む女帝論

糸切り歯で糸を切る習慣。「健在」でユーモアを持つ句となっている。「白酒」からお雛様へ、その顔立からお公家さん・現代の皇族へ。そして現代の女帝論へと導く手際に感嘆する。

風染めて足元染めて芝桜
春雷一閃水面に鰷の走りけり
沖ノ島姫宮恋うて飛魚のとぶ

風も染めるのは芝桜の広い群生地であろうか。固くはない水面に鰷を見た感性がすばらしい。神宿る島「沖ノ島」。祀られた姫を恋う人々を、「飛魚のとぶ」と言い表した格調高い句。

熊倉千重子

下萌や雀侍らせかな女句碑
風光る今日はご機嫌風見鶏
花ぐもり鶯張りの音こもる

草の芽が生え出ていることに、かな女は気づいたであろう。雀が来ていることも。無機的な風見鶏の擬人化に「風光る」が良い。花曇りに鶯張りの音がこもるとした感性はするどい。

金魚鉢見詰めて居れば見つめられ
朝顔の絞り解けて朝刊来

「金魚鉢」の中の金魚との微笑ましい夏の一風景と見た。朝顔の蕾を「絞り」、その開花を「ほどけて」との表現がよく、夏の朝の情緒を満喫している作者の様子が想像できる。

染谷風子

春浅し前頭葉が武者震ひ
浅草のはだか踊を荷風の忌
短夜やかつて御国に通ひ婚

前頭葉は「思いを言葉にする」という。浅春への覚悟か。踊り子に囲まれた荷風の写真。そうだ浅草へ行こう、と読める。郷里にはあった通い婚。短夜だけに情が深まるのである。

八文字復習ふ半玉夜の秋
文弱な人は嫌ひよ単衣帯

花魁道中の八の字に足を繰り出す歩き方を半玉がお復習いするのは夜分か。「夜の秋」が良い。杉田久女の「単帯」の句へやり返すかな女の「紅芙蓉」の句をみごとに暗示した句。

随所作主

五明　昇

白菜の舟に馴染ます赤穂塩

懐かしい若狭の風情に憧れて三句を抽出した。雨の予報にいそいそと花種を蒔く一朝も、新じゃがの一株をほくほくと煮上げる一夕も、豊かな自然と濃やかな人情に育まれた若狭ならではの景であろう。白菜漬けのトロ舟に手秤で振る赤穂の塩には、遥かな瀬戸内の香りも仄かに漂っている。

二百号といひて残雪光りをり
峰雲へとどけ恒例三本締め

昨年一月、『鳥羽谷』が通巻二百号を迎え、六月には『水明』の創刊九〇周年・通巻一一〇〇号記念祝賀会が催された。掲句は二つの慶事を高らかに詠み上げて見事である。

矢作水尾

海風や勢あらたに夏つばめ
緑陰を出づれば岬晶子の碑
鰤大漁かもめ引きつれ接岸す

海風に力強く飛翔する夏燕は二番児の子育て中か。真鶴岬にはこの地を愛した与謝野晶子の「わが立てる真鶴崎が二つにす相模の海と伊豆のしら波」の歌碑が立つ。かつてブリ漁で栄えた真鶴港は今は伊勢エビが中心とか。真鶴に育ち、海を詠んでは水明随一と称される作者の真骨頂の作品だ。

逝きし人なほまなうらに春コート
米をとぐ音が宵闇連れてくる

星野和葉

割烹着を晴着とせんや三が日
糠床の天地返しや今朝の秋
ジャズ流し手際よろしき煤払

正月三が日は人の出入りも多く、主婦が晴着を着て鎮座している訳にはゆかない。現代風でおしゃれな割烹着を着けて、かいがいしく立ち回る作者の姿が垣間見える。秋立つ日の糠床の「天地返し」や、ジャズを流しながらの煤払いにも、とかく忙しい主婦の日常が活写されている。

筑波嶺の二体寄り添ふ遠霞
花屑をけりて別れし人想ふ

茨城県のシンボル筑波山は、西側の男体山と東側の女体山が永遠に変わらず仲良く寄り添って立っている。落花の下、花屑を蹴って別れた人を想う作者の心情に胸を打たれる。

島津初花

花種や雨の予報を聞きて蒔く
新ジャガのまづ一株を煮上げたり

齢九十を超え益々お元気な作者だが、春コートに亡くなったご夫君を偲ぶ一句は感慨深い。米を磨ぐ音が連れて来る宵闇には、懐かしい人の影が紛れているのかも知れない。

梅澤佐江

蜘蛛の巣の真珠光りや雨上り
乾く程からくれなゐに唐辛子
ぎんなんの爆ぜて古代のひすい色

王朝風の雅な句を得意とする作者が詠んだ色彩感覚豊かな三句。真珠は華やかなピンクパールか純白のホワイトパール、からくれない（韓紅、唐紅）は紅花で染めた濃い紅色、翡翠色は青緑から黄緑にわたる艶やかな緑色。いずれも美しく宝石のように輝いて、対象を鮮やかに際立たせている。

恋に落ちたるごと抜け出せぬ春炬燵
琴線に触るる音して月冴ゆる

ぐずぐずと抜け出せぬ春炬燵を「恋に落ちたる」とはよくぞ言ったり。中天に冴え渡る冬の月は確かに琴線の音を曳いている。瑞々しい発想と措辞が読者の心を掴んで離さない。

松宮保人

子に移す手に蛍火の透き通る
餅搗や手返し女の手際よし
良縁の話し纏まる白障子

掲句は、各地で失われつつある「旧きよき時代」を、風情たっぷりに詠み上げる。父の手に光る蛍は子どもにとっては何よりの宝物。ぴったりと息の合った夫婦の搗く餅の何んと美味な事か。白障子の座敷で纏まる良縁に幸多かれと祈る。こんな風景の残る若狭に改めて惹き寄せられる三句だ。

産土の懐にあり山笑ふ
土器を五湖一望に雲の峰

慣れ親しんだ故山の懐に抱かれて春を迎える喜びや如何に。梅丈岳の頂きから、願い事を書いた素焼きの皿を空高く投げる「かわらけ投げ」は、若狭観光の人気スポットだ。

曲淵徹雄

ビル風のつるむ十字路冴返る
提灯の尻も小躍り踊唄
おほつぴらに軋む江ノ電冬めける

一句目、ビルの谷間を通り抜けてきた小寒い風が交差点で絡み合う様を「つるむ」と表現。二句目、踊り手の提灯の揺らぎに、高揚した踊りの熱気を鮮やかに活写。三句目、そう言えば江ノ電の軋みに遠慮なんぞはありませんね。いずれも句材の切り取りと季語の巧みな斡旋が光る秀句だ。

操りの糸切るるごと止む噴水
噴水の止んで生まるる沼の色

作者の散歩コースの別所沼には、水中タイプの噴水が二基設置され、訪れる人の目を楽しませている。掲句は噴水の止まる瞬間、直後に現れる水面の色の変化を見事に捉えている。

一陽来復

島津初花

茂木和子

暮れさうで昏れぬ夕空時鳥
暮泥む河童出さうなこの涼風
泥鰌鍋老い賑賑と囲みけり
付き合ひ酒の流れに食す泥鰌鍋
好き嫌ひ誘はれてゐる泥鰌鍋

時鳥は初夏に渡って来て秋に帰る渡り鳥で、巣をつくらず鶯の巣の中に卵を産み雛を育ててもらう要領の良い鳥と知る。二句目は、暮れそうでなかなか昏れない刻は何か出そうな予感がする。河童という架空の生き物が出そうな涼風とは、如何のものか。冷ややかな風でしょうか。

昔から泥鰌鍋は夏バテ予防に効くと言われ、他に柳川鍋も有名である。作者は友達との会食は泥鰌鍋と決まった。付き合いの酒があれば良しとして意気投合したが、実はこの鍋は少々苦手だがどうしてもスルー出来なかった。筆者は、回転寿司と言っただろう。賑やかな笑い声が聞こえる様だ。

由良ゆら女

窓開き天に始筆の夢一字
初泣きや末は大器と囃さるる
猿の芸真似て輪に入る春着の子
「マネキン」にあやかりたしと初天神
寒濤やカフェの灯に聴く遠汽笛

新しい年の始めに、書に親しまれている作者は、大空に大きく「夢」と書かれた。実に素晴しい一字である。初泣きの嬰の声にも、大きければ将来が楽しみと悦びがある。猿の初芸は、良く人に馴れ、子供達の動作に似ている。この句の子供は、実にユーモアで友達の中でも人気者と思われる。

主宰の句集「マネキン」は三〇〇ページに及ぶ秀句に圧感である。作者はこれに肖りたいと初天神にお約束されたのではないでしょうか。初詣の帰りは温かな灯とコーヒーに癒されて居られる。遠汽笛は一日の終りを語る。

柚木治子

天高し青一色の無限大
もろこしや耳まで裂くる食べつぷり
茹でたての平和の色や玉蜀黍
梯子して秋蝶を吸ふ虚空

一瞬の俳句に似たり流れ星

トウモロコシの句は短かいが、熟した実を捥ぎ取る楽しみも子供達にはある。茹でたての一本丸かじりは耳をはみ出すくらい大きい。それは平和の色と詠まれている。秋蝶は残り少なくなっていく花の蜜を集めるのに必死である。一日が終り夜空を見上げると流れ星が目の前を一瞬走った。その僅か一秒の中になにかロマンを感じ、俳句づくりも一瞬の感動の言葉を編んでいると思う。

内田恵子

初富士に簪のごと雲のあり
初騎の馬の鬣編み上げて
モノクロの景を震はせ冬の雷
数学の解けぬ難問冬の雷
油絵具のさまざまな白雪景色

初富士が簪をつけている様に雲は良き風景を作っている。初騎馬の飾りにも心が入っている。突然にくる冬の雷は、大きな一発で終ることが多い。しかも最大の音量で一瞬に辺りをモノクロに変え不気味。数学の難問に行き止ってしまった。作者は、水明誌の表紙を飾っておられる油絵作家。毎月俳誌が届くと、まず内田さんのお顔が浮かぶ。この句の「白」はいろんな雪景色に使い分けがある様だ。作品を拝見したい。

近藤徹平

故郷の目抜きをちこちぺんぺん草
木の芽風戦争ごつこせし古墳
春日和スタンド響むホームラン

久し振りに故郷へ帰られた様子が一句ずつに滲み出てくる。戦争ごっこで走り回った古墳、野球に明けくれ、ホームランの歓声が響んだ校庭、石の場所も姿を変えずあの時のままだ。沈下橋の下の辺りで鮎をつかんだ時もあったっけ。故郷はいつもやさしく迎えてくれる。

野田静香

篳篥（ひちりき）に言霊を乗せ春の闇
子どもと大人の境目春愁
頼もしき二代目女将蘆の角
御食ひ初め小さき器の桜鯛

雅楽の管楽器でその豊かな音色は哀調を帯び、守り継がれていることはすばらしい。子供の成長は実に早い。中学校へ上がる頃が節目ではなかろうか。お食い初めは、産れた日から百日目を祝う行事で、鯛のお頭付き、お赤飯で祝い。口元へ運ぶ仕草をして写真に納めるのも良い。将来が楽しみ。

六華撩乱

星野和葉

波多野寿子

胸中のわづかなゆらぎ凩吹く
もう逢へぬ人を恋ふれば落葉舞ふ

凩が吹いて落葉が舞う。どこでも見られる光景だが、この日の作者は違う。あの時もこんな中だった。会えぬ人を思い胸が締め付けられる。いいですよね。こんなロマンス。

人形のうなじ美し秋子の忌
嵯迷忌や絵巻の語り見て飽きず
春愁や閉ぢし文箱をまた開くる

やっぱり二月になると詠まずにはいられないお二人の事。お二人共昭和四十八年二月に亡くなられた。作者と秋子氏は同じ年齢で、この年の寅年生まれには女傑がお揃いでした。

大村節代

朝食はクロワッサンと寒卵
コーヒーブレイク鉄瓶に沸く寒の水

ゆつくりとイエスタディを聴く余寒

寒卵はスクランブルエッグかハムエッグ、これにグリーンサラダでばっちり。編集の仕事で目も肩も悲鳴をあげないうちに南部鉄瓶で沸かす湯で淹れるコーヒーを。春を待ち侘びる夜はゆっくりと紅茶にしましょうか。

冠木門男粋がり今年酒
横丁の馴染の小店新走

冠木門から出て来た粋な男は「まだこれ切りでは」と馴染の女将のいる店へ、新走ではすぐには帰れないでしょう。

五明　昇

節分の鬼が逃げ込む縄のれん
居酒屋へ桂馬跳びする春の泥

「福は内、鬼は外」と豆を投げつけられた鬼役が逃げ込んだのは予定通り縄のれん。雨上がりの道を桂馬跳びとは面白い。こちらも居酒屋へ。お酒好きでないと詠めない楽しい句。

真つ先に朝陽がくぐる夏越の輪
富士塚を曳かんばかりに蟻の列
抜け井戸に忍びの影か黒毛虫

確かに納得はするが、夏越の輪を朝陽にくぐらせるとは誰とて思いつかない。大きな富士塚に小さな蟻の列、毛虫は忍

者に仕立てて抜け井戸に這わせる。毛虫に黒を被せる念の入れ様。旅好きの作者は見聞が広く自在に取り合せる。

藤澤喜久

茅葺きに山茱萸の雨黄にけぶる
梅雨前線日輪涙脆きかな

黄色の小花を集めてつける山茱萸は木全体が黄金色になる。茅葺に降る柔らかな雨が黄色にけぶる。梅雨前線の動きに人は一喜一憂する。太陽が涙脆いとは思いも寄らない比喩。

愛称で呼ぶ友の居て秋祭
幼馴染の〝生きていろよ〟と今年米
くすつと笑ふ訛懐かし鶏頭花

愛称で呼び合える友人がいらっしゃるとは幸せ。米所に住む幼馴染から新米が届く。〝生きていろよ〟のメモがいい。懐かしいお国言葉に一瞬笑ってしまうが、次の一瞬ほろりと。

松井由紀子

埋火のごと闇にあり蝕の月
蝕終へて素肌うつくし冬の月

十一月八日全国的に見られた皆既月食、月が地球の影に入り暗赤色の月を多くの人が見たと思う。この月を灰に埋めた炭と思った作者、大きな宇宙と小さな火鉢の対照、発想がすばらしい。

ラフランス手首撓はせ貰ひけり
卓上の異端のかたちラフランス
描く間をじわり熟れゆくラフランス

形、色、芳香、やわらかな果肉のラフランス、作者は何となく身も心も嫋やかになっている。

日髙道を

夕凪や島のをんなは舟を待つ
高欄に巫女の衣擦れ夏初月

瀬戸内海沿岸の夕凪が有名。その内の島を出ようと舟を待つ女性の眼差しが気になる。夏初月は陰暦八月初めの月をさす。作者は、待ちきれずに夏を被せて詠まれた。

カンナ立つ監視カメラの作動中
いなつるび廊下の奥に夜叉の面
字余りの一字を呪ふ秋の夜

流行りの監視カメラだが、逆に真っ赤なカンナが何か監視している様だ。廊下の奥の夜叉の面が危ない、何か写っているかも。呪われたのは誰でもない字余りの一字だ。分かる、分かる。

年　輪

松宮保人

西山貴美子

霜月や嬶座に在れば母を恋ふ
弥増せる雨を両手に年用意
板塀の一点暗し鬼やらひ

昭和の世では、冬の夜家族はいろりを囲んで暖を取ったものだ。一家の主婦の座席は正面の横座（主人の座席）の右脇で、台所に近い所と決められていた。苦労を苦労ともせず凛として過ごしていた母を……。歳月は流れ今、自分は主婦の立場ではあるが、そんな母の姿が懐かしく思い出される。

茅の輪くぐり心まどかになりゆくも
青北風やゆくらゆくらと舫ひ船

「茅の輪くぐり」は、たまたま山梨県の信玄をお祀りしている武田神社において経験したことがある。ただ輪をくぐり抜けるのではなく手順や方法がある。唱え詞を唱えながら8の字に3度くぐり抜けていると、だんだん心が和んでくるようだ。

境　延昭

山眠る地底にマグマ滾らせて
ばらの芽や恋のはなしは全て嘘

自然（地球）は想像を絶する凄さなのである。特に中心部のマグマは一三〇〇度以上もあり活動を続けている。一方地上では日本のように美しい四季がある国も少なくはないが、冬になれば「山眠る」とは素晴しい日本特有の表現である。

秋立つや線状降水帯の赤
鰯雲幡立ててゆく野辺送り
ゐのこづち雑木林の秘密基地

「線状降水帯」とは気象用語で、要するに同じ場所で雨雲が発し続け、同じ場所で雨が降り続ける雨域のことである。よって災害を引き起こすことにもなる。句末の「赤」が気象予報を注視する作者の心境を現している。

小倉倭子

主役より脇役達者菊人形
スケッチする野原に座して君影草
澄む秋のコンサートへとハイヒール

当地福井県では、毎年たけふ菊人形展が開催される。メインとなるのがNHK大河ドラマの武将達である。御句に出てくる「主役」を飾っている菊花への照明が強かったのであろうか、少々萎れていたのかも知れない。「脇役」に対し見映がしなかったのであろう。たまたま見付けた菊人形展の滑稽な光景である。

生命線を突かれ餌を愛鳥日
群衆の闇の孤独や揚花火

ある初夏の晴れた日に、近くの公園であろうか、そぞろ散歩していると鳩たちが集まって来るではないか。餌を買い求めて、掌で餌を与えてやったのであるが、折しも、その日は愛鳥週間の一日であった。「生命線を突かれ」が際立つ。

大場順子

薫風や筆勢をどる命名書
舞ひ込みし火蛾と一駅同席す

風薫る初夏の佳き日に元気なお孫さん（男の子）が誕生したのだ。命名書の跳らんばかりの字体が奥座敷に掲げられている。お祖母ちゃんの喜びも一入であろう。

涼しさや暖簾にゆるる青海波
滴りや苔青々と神の岩
古井戸は城の抜け道ゐのこづち

ある暑い夏の日に街を歩いていると、店には無限に広がる波の文様の暖簾が自分を招くかのように涼しげに揺れているのである。思わずその店の暖簾を潜ってしまった。

大塚茂子

春駒の腓美し跳ぶ牧の朝
わらべらの散華や村の春祭
夏初め堀割響く利休下駄

春に生まれた若駒が朝の牧場を親馬に伴なわれて駆けて行く姿がいかにも微笑ましく、特に若駒のふくらはぎが美しく飛び跳ねている。将来は素晴しい競走馬となるであろう。

翡翠の風に色あり急降下
さるすべり武人埴輪のまろき肩

かわせみは雀より大きく、体長約一七センチで、夏に河川や湖沼等に棲息する。体の上面は暗緑青色、背腰は美しい空色で「空飛ぶ宝石」とも称される。水中の小魚やザリガニなどをとる。そんな動作を「風に色」と「急降下」で美しく表現している。

河野はるみ

初東風や気象を癒す青き空
団子屋の煙吸ひ込む春霞

春の訪れを感じさせる早春の風は、寒く長い冬から開放される時季のはずだが、この季節の変り目を必ずしも快しとしない人もいるであろう。そんな時に外に出て見れば、そこには青い空が広がっているではないか。自分の何んとも言えぬもやもやした気分を癒してくれるのだ。

水底に朝日差し込み目高の緋
片蔭や袴の女かに歩き
田んぼアートの顔がやの字に野分過ぐ

家の古池には、朝の光が水底まで差し込んでいて可憐な緋目高が気持よく泳いでいる。夏の朝に見付けた静かな光景。

梅見月

柚木治子

家守る二百余年の藪椿
風薫る犬に格付けされてをり
泥鰌鍋茶屋に小さな隠し部屋
太陽を裏返したき極暑かな

令和四年度の「かな女賞」を受賞されました。夏季競詠に出された蝶の句もすばらしく、主宰が「目から鱗」と評されていました。第二句、藪椿は、旧家を支えてきた女性の象徴であり、作者の人生と重なります。第三句、猫は飼ったことがないので分かりませんが、確かに犬は人間を良く見ています、どんな風に格付けされても薫風なら癒してもらえますよ。

田寺玲子

初講義マニキュア赤き師の源氏
春節の龍をどり込む喫茶店
薫風や港都駆けゆく人力車
秋暑し須磨海岸を修道女
草紅葉川にのぞめる摩崖仏

第一句、難解な源氏物語、マニキュアの赤き師に少しの驚きと期待を込めて。第三句、「駆けてゆく」の中七で動きのある句となり法被姿の車夫の韋駄天走りが浮かびます。

栢尾さく子

生も死も永遠の秘めごと星流る
享年は今日かも知れず霜の朝
初蝶蝶発心の翅広げたる
足萎えてより遠くなる草の市
異国語を学ぶ八月の九十九髪

第一句、生死は自分では決められない。そのような大事なことを永遠の秘めごとと詠まれた勇気をたたえます。季語の星流るに胸があつくなりました。第三句、発心と言う仏語を使って翅を広げた初蝶の一瞬を神々しく描かれています。第五句、九十九髪もなんのその、異国語を学ばれておられるとか。それも八月の暑さの中でご立派です。

石山かつ子

息揃へ大縄跳びの輪の中へ

第四句、月の名所でもあり、いくつもの物語がある海岸に静かに佇む修道女一人。季語が謎めいた女の背中を押します。

鳥羽和風

ある涙全部出し切る春芝居
雲水の前を横切る春ショール
父の日や息子に変はる世帯主
蛍狩シャボンの匂ふ子を連れて
湧き水に接吻したり汗の顔

全国大会にて、三極の「天」と「山紫賞」に輝かれました。鳥羽谷の風土そのままのおだやかなお人柄とお見受けいたします。第二句、映画のワンシーンを思わせる取合わせが見事です。第三句、世帯主をご子息さんに渡す安堵と一抹の寂しさが淡々と詠われています。

正木萬蝶

「大河ドラマ」の佳境に入りぬ冬隣
同胞の慶事で仕舞ふ古暦
眩しくて時には冥き日向ぼこ
白桃を剥くや忽ち桃源郷
朝顔の真中に夜の名残かな

今年の全国大会において、季音賞、三極の「人」、高位得点者の一位に輝かれました。第二句、慶事で終った一年をふり返りながら来年もと願う作者。第四句、桃源郷の表現には、脱帽。第五句、夜の名残とは、花の真中のおぼろを詠まれたのでしょうか。何という詩的なことばでしょうか。

青木鶴城

少年狼を愛す秩父の山野冬
朝東風や絵馬縦書きか横書きか
割烹着の女将のおしやべり鰆刺
連山の色太りゆく夏はじめ
告白のメールに「既読」夜の秋

第一句、秩父の山に狼が居ると信じ、休日には、仕掛けたカメラを見に行かれる人の話を聞いたことがあります。秩父の山野へ思いをはせる時、作者も少年に戻るのでしょう。第三句、瀬戸内の旅吟でしょうか、女将の鰆刺にほろ酔う様子が分かります。第五句「既読」マークがついたのに返事が来ない。静まり返った夜、不安な気持をぬぐえない作者。

山本鬼之介　選

水明集

さいたま　新　暦文

凩や句碑その上の月静か
冬の靄湖底にねむる罔象女（みつはのめ）
凩や女ひとりの赤提灯
冬耕や夜は炊き立て白まんま
肩書きを息子に譲りちやんちやんこ

梅澤輝翠

新しき障子運ばれ阿弥陀堂
すがれたる水引の花初冬かな
全山の姿変はるや散り紅葉
江ノ電のワイパー忙し夕時雨
全集を伏せて手にする柿落葉

さいたま　池田珪子

水面の落葉や下に動くもの
妙高に雪来る音や一茶の忌
極北の枯野を貨車の通りけり
冬ざれや路地の奥よりサキソフォン
冬夕焼白き妙高くれなゐに

上尾　横山君夫

磴百段のぼり切る間の時雨かな
夕時雨地下へと降りる純喫茶
帰り花古木の支柱あまたなる
帰り花旧友たちに出逢ふごと
冬夕焼映ゆる煉瓦の旧庁舎

熊谷　越田栄子

思ひ出は母の味なりとろろ汁
人生の主役は自分小鳥来る
離れ家の涸れぬ井戸水花八手
ランナーの追風となれ木枯よ
夕暮の土鍋ほこほこ冬めく日

さいたま　反町　修

帰港待つ漁師の妻の息白し
石庭の余白の妙や冬の空
文化の日使ひ込みたる広辞苑
綿虫や恋の出合ひは死出の旅
朝帰り霜をいただく辻地蔵

黄落期古本市の神保町
捨てられぬ夫の背広や冬三年
広辞苑ひくタッチ音冬の夜
珍客のひ孫迎へて小六月
酔客の高笑ひ背に熱燗を

海に出し木枯帰る船溜り
女小走り凩止まぬ歌舞伎町
看板は「質屋すぐそこ」一葉忌
冬耕を終へて薪割る侘住ひ
顔見せて見せては消ゆる鳰の湖

凩に押され行きつく縄のれん
凩に落葉が踊る大通り
古井戸へ想ひを寄する一葉忌
一葉忌べんがら格子にあふ路地
約束の小指は赤児着ぶくれて

天つ神の依れる磐座冬紅葉
アレグロの落葉時雨よ奏楽堂
この橋を渡れば異界雪ばんば
人捜す防災無線雪催
鴛鴦や身過ぎのすべの変化球

さいたま　清水桂子

渋谷きいち

篠崎紀子

染谷風子

帯解のはにかむ頬や奥座敷
山茶花や白杖の人通り過ぐ
大根引き仰げば空の真青なる
まばらなる昭和の硬貨酉の市
公園に残る酒壜冬の雨

落葉掃く若き僧侶の目はブルー
落葉風回転ドアを押す女
月並な膳を格上げ酢橘かな
男らの和太鼓連打大榾火
不忍池茫茫と敗荷

黙黙と冬服の行く交叉点
冬服の隠しに潜む電話メモ
思ひ重なり肩にずしりと冬の服
日向ぼこ全て吐き出すわだかまり
葉隠れの茶の花白し閑の寺

舟運を偲ぶ町筋黄落期
黄落や車椅子押す妻のひと息
茶の花や潰えし蜂起たどる道
浅き冬樽と重石の天日干し
奥多摩を彩なすカヌー冬うらら

さいたま　元田亮一

小林京子

菅原真理

越谷　阿部幸代

潮騒や蝕こつこくと冬の月
ラグビーの選手は戦士ちからこぶ
失せ物にかまくる夜や隙間風
庭の蛇無事穴入りを果せしや
いまだ来ぬバス待つ列の息白し

平塚　丸屋詠子

黄落の道急ぎゆく画学生
豊作の広き見沼田黄金波
冬麗や贅なる館前田邸
冬耕を終へし黒土陽とあそぶ
さすらひの旅も楽しや芭蕉の忌

さいたま　山岸久美子

遠野へとSL「銀河」枯野行く
柳散る橋渡りゆく白い杖
踏ん張つて競争輓馬息白し
野沢菜漬信濃は長き冬に入る
鷺白く輪舞の沼や柳散る

西幅公子

賑はひの戻る古書市冬はじめ
芋茎剥く縄文人の手も斯くや
孫の名と同じ仔羊冬ぬくし
ほろほろと零余子手に受く野の駄賃
灯油売ゆつくり冬を曳きずり来

本橋稀香

冬めくや座禅指導の僧一人
冬めくや飛行機雲の筋二つ
冬ぬくし変奏曲の譜面台
神木の立枯れのまま神無月
冬ざれや禁教の島波高し

さいたま　村杉清吉

冬耕や男一人の耕耘機
凩や津軽じょんがら絃高く
木枯に向かひて衿を正したり
鳥さんと神に残して木守柿
路地裏の赤提灯のおでん鍋

新井孝麿

鷹匠の呼気の瞬間鷹飛翔
黄昏に急かされ歩む枯野道
SLの入り日に染まり枯野ゆく
冬晴や銀輪かくる墨衣
写真屋の宥め笑はす七五三

岡田宣子

寒雀みなで捜すや拠り所
湯豆腐や落し所を知つてをり
冬耕の昼餉は今日も無口なり
冬耕の畦道行くやニット帽
芭蕉忌やぽつねんと我すする茶よ

川口　新井のり子

待ち侘びし踊りの会へ文化の日
けらつつき静寂破る峠茶屋
静寂を破るこげらはリズミカル
きつつきの研背にして山下る
どぶろくを提げて急ぐや夜のまどゐ

さいたま　加藤でん治

冬耕や日の暖かく妻包む
凩や障子はみ出す影法師
凩衝いて走る少女や茜雲
梵鐘の深き音色や冬銀河
木枯に耐ゆるばかりの道祖神

霜多光代

黄落や無知にやさしき物理学
世渡りのうまき妹ゐのこづち
浮気癖ぬけぬ遺伝子ゐのこづち
樹木医の見立て違へし帰り花
明荷解く街は立冬ふれだいこ

伊奈　菅原卓郎

空狭き都会を離れ神無月
神無月神々なべて里帰り
雪虫や古き学舎今いづこ
綿虫や綺羅なものには毒がある
禁酒せし父の背中や冬すみれ

さいたま　千坂平通

冬晴にパワーシャベルが会釈する
廃校の鉄棒に舞ふ黄落よ
はらはらとまたはらはらと黄落期
冬晴や吾が来し方を良しとする
木客も杣道下りて冬支度

さいたま　飯田忠男

朽葉ふはふは歩む湖畔や冬浅し
柳散り隅田川行く婿の船
金銀の蒔絵の展や小六月
全力で冬服詰むる旅かばん
しまなみをペダル踏み越え冬日和

森下美智枝

行くほどに紅葉深まる奥信濃
沼沿ひの紅葉づる木々に鷺あまた
糝粉細工の技に見惚るる酉の市
裸電球ゆれて華やぐおかめ市
石蕗の花苔むす岩を彩りぬ

斎藤みよ

石蕗咲くや養殖筏たゆたへり
花柊志士の館を守りをり
冬耕や鍬に楔を打ち直し
紅葉山天守を乗せて空真青
照紅葉下でハモニカ吹く老爺

伊予　向井章子

稔り田の黄金まぶしき朝の風
まだ重き瞼のままの庭紅葉
生垣の秋蝶出口さがしをり
濃きうすき今朝手鏡の山紅葉
蔦紅葉崖にひとすぢ真くれなゐ

行方　山岸弘子

柳散り京の町行く人力車
周航や運河の岸に柳散る
恋愛は全く無縁波の花
冬浅し間歇泉に虹生る
冬服や長き素足の小学生

さいたま　竹澤和子

どれ着ても似合はぬ齢小春空
寺参り形見の衣に初時雨
身に入むや友の絵のある喫茶店
目を病みて俳句の道へ冬の虫
山茶花や病者に告ぐる美しき嘘

杉戸　佐々木史女

こつこつと遺跡掘る背片時雨
もう一花咲かせて見しよと帰り花
発荷峠越えて十和田の冬花火
武甲仰ぐ墓地にはらはら冬紅葉
木枯しや弥彦奥社を響動もせり

春日部　仲田利子

空き家の鬼門に今も花八手
卒塔婆の白木眩しき小春かな
ありつたけの紅のつつじや返り花
しぐるるや五百羅漢の泣き笑ひ
時雨来て宿の唐傘出番待ち

春日部　諏訪サヨ子

鷹急降下はるかより来ぬ鳥の群
参道を影踏みのごと七五三祝
陽の温みくるむ敗荷池ねむる
雪落つる残響高き青空
とつとつと告白のやう木の葉散る

吉川　杉浦理恵

黒色の革ベルト切れ冬来る
冬蝶と十階へゆく昇降機
踏んばりて弓引く像や冬日和
残る虫キッチンカーは去りにけり
常設のベンチの上に紅葉散る

さいたま　吉川拓真

全壊の村今は元気に冬桜
黄落や浪漫漂ふ並木道
水澄むや舟唄聞こゆ広き川
客寄せの赤いロボット冬の街
浅草を冬服の犬散歩かな

野村美子

旨さうに夕日呑み込む大枯野
枯野行く大魚のごとき雲の影
水鳥のなめらかに断つ湖月かな
木枯や転がしてみるオノマトペ
焼菓子はウクライナ製春を待つ

さいたま　横山礼子

くつきり見ゆる遠富士初冬かな
家事よそに粋に銀ブラする小春
こはばる手風の声聞く冬初め
土産にと佃煮買ふや柳散る
冬服おろし垂れを落としてうろたふる

小川洋子

古民家の屏風の陰の桐箪笥
しぐるるや歩き五分の駐車場
首振りの逆の足掻くかいつぶり
舞ひ上がる飛行艇のやう大白鳥
冬ざれや東京タワー移ろはず

皆川更穂

室の花武骨な手から絵手紙に
バイキングの品数多し冬紅葉
武甲山の再生遠し山眠る
取り掛かる干支の木目込冬もみぢ
主病み見事な庭も冬ざるる

山戸美子

池一面黄昏色の敗荷や
銀杏散る飛行機雲は淡く消え
マイク握る市長候補に初時雨
遠慮がちに枝の陰より帰り花
賞目指し気迫の眼差し菊花展

草加　外村紀子

貨物列車の連結のおと霜の朝
貨物列車のゆるりと向かふ霜の朝
放たれし鷹ひとまはり大手門
水鳥やサンクチュアリの覗き穴
オリオンやあの日と同じ屋根の上

さいたま　石関六弦

凩が一号名告りラジオ告ぐ
凩にぎゆつと拳を交差点
井戸端に声聞こえさう一葉忌
冬耕や土間に地下足袋温くあり
冬耕や義父の真つ赤なトラクター

鳴海順子

鼻先を何やら過ぎる枯野かな
枯野道不屈の赤きスニーカー
空模様何処吹く風の浮寝鳥
朝まだき水鳥の声透き通る
墨摺るや音と香りの冬ぬくし

綿貫ひさの

柿落葉庭に錦の衣着せ
踏みしめて銀杏落葉の寺の庭
ほほ寄せて揺れて笑ふよ秋桜
青空に銀杏黄金の葉を広げ
石狩鍋北の大地の湯気香る

冬うらら円陣を組むヨガマット
鈴の鳴る道よ幸あれ七五三
諍ひの果て白菜の芯刻む
石蕗の花ひととき揺るぎ城に向き
月食の月は彼方へ葛湯ふく

秋寂ぶや嫁終へたるはいつのこと
返り花見知らぬ人と目の会釈
赤ワイン一杯だけの小夜時雨
冬麗生きし証しや鼓動音
畳紙に母の結び目寒椿

遠来の友は菊花の香り連れ
黄落を背に受けつつ散歩道
園児らのポケットあふるる新松子
松手入れ鼻歌まじりの庭師かな
主無きの民家覆ひし蔦紅葉

さいたま　石浜悦子

大阪　遠藤人美

さいたま　小山あつ子

和歌山　嶋田洋子

わだつみに守られ島に鳥渡る
渡り鳥降り立つ湖や波光る
夕日背に群黒々と鳥渡る
新米の素のおむすびの甘さかな
戦無き地に生かされて今年米

腰据ゑて紅葉日和の外湯かな
正客や小春日和の緋毛氈
柚味噌の小鉢底まで舐めし夫
綿虫や今日は誰とも会へぬまま
友は逝く冬銀河からお出迎へ

枯野原草の輪ひとつ見つけたり
傍らは白き小花や枯野行く
足形のシールに木の葉国宝展
浮寝鳥波のまにまにたゆたへり
流されてすみつこぐらし浮寝鳥

陽だまりの色を集むる蜜柑かな
みかんみかんちんまり包む滴りや
幾度も手に取るチェーホフ山眠る
獣らも草木も目閉ぢ山眠る
赤々と月の食まれて山眠る

さいたま　後記朝香

鈴木藻好

樋口元美

東京　山中いちい

峡の空わきでるやうに小鳥くる　鬼石　榊原聰子
小さき手で小さきポッケに木の実かな
新そばや五歳（いつとせ）ぶりに友来る
腕にきてゆるりゆるりと冬の蠅
地に落つる前に輝く冬紅葉

いつの間に八十路の暮し芭蕉の忌　川口　田村福美
老夫ひとり見渡す畑を冬耕す
ご近所のコキア絨毯染まつたね
木枯の近づく気配今朝の道
冬近し日暮の刻を計りかね

真青なる空から降りよ銀杏落葉　さいたま　奥山粉雪
野分あと芒の丘や平らかに
晩秋の日は音をたて沈み行く
喜寿同志讃へあひ行く秋の山
秋湿り石の館の青き色

浮寝鳥風に吹かれてすみつこへ　小駒さち子
水鳥や餌まく人の声覚ゆ
枯野へと踏み出す足は止まりけり
光受け道見つけたる枯野かな
大祖母の織りし被布着せ七五三

病める日も明るく見えし石蕗の花　さいたま　染矢峯雄
鉢の石蕗日毎愛でるも今朝咲ける
山茶花の花びらもあり子ら遊ぶ
仰ぎ見る氷川神社の冬紅葉
賑はひを指差す吾子や熊手買ふ

満天の星のきらめきホットワイン　山下ユリ子
公園のベンチに木の葉冬ざるる
ホットワインカウンターに女三人
二才児の歓声黄葉をまとふ
溜息をこらへホットワインかな

阿六櫛求むる道や初時雨　森　和子
切通し抜けて明るき初しぐれ
木の葉舞ふよろづ屋傍の精米所
一人づつ渡る吊り橋木の葉雨
渋滞の木の葉のワルツボンネット

二階から顔出す猫や今朝の冬　秋谷風舎
濡れ落葉すつてんころり一合目
木のうへの鷺木のもとに浮寝鳥
山影を追ひて藪こぐ枯野かな
火柱や気球沸き立つ枯野原

手のひらにひとつの命雪ばんば
延々と続く猪垣島の尾根
押し入れに首突つ込んで冬仕度
冬仕度足踏ん張つて漬菜石
朝寒しバス待つ人の背の丸み

さいたま　湯浅　和

白壁に映ゆる夕陽や冬浅し
七五三袴と草履持て余し
秋夕陽つい口遊む母と子と
巷では空虚なる声冬浅し
冬来り招看板南座に

東京　畑宮栄子

立冬や置いてけぼりの鳥一羽
柿落葉となりあはせの駐車場
延々の落ち葉たどりしなわのれん
冬めきて座布団かかへうとうとと
柿収穫時期を鴉と相談す

さいたま　川島夕峰

宇宙まで突き抜く青よ冬の空
時雨止む傘を杖とし歩む母
山茶花の道の地団駄いやいや期
冬浅し月命日の焼団子
逆光の中で遊ぶ子冬浅し

橋爪さなえ

柿たわわひいふうみいとお裾分け
芝居小屋予期せぬ咳に大慌て
箒目の幾何学模様落葉かな
山茶花の乱れ散る道踏み入りぬ
富士見坂凩の中驀進す

さいたま　福田育子

祝詞だけ神妙に聴く七五三
枝折戸に石蕗の花風情添へ
若かりし三の酉へも皆一緒
小庭にも匂ふは青き秋の風
賽銭が後から降る酉の市

川村　治

夕明かり白き山茶花零れをり
垣沿ひのさざんか日和ランデブー
バス停の老若男女今朝の冬
神無月詣でのあとの長話
神の旅仰ぐ鳥居の高さかな

東京　柳父はる

影踊る冬の朝日を背に浴ぶ
たそがれて白き山茶花浮きいでし
朝早きマラソン人の息白し
街路樹のいろとりどりや冬浅し
達者でと冬夜の別れ影薄し

さいたま　鈴木香音子

木枯や碇泊港を揺らし過ぐ
木枯や鎮守の森にトトロ来る
木枯に邪気一掃のビルの街
陽の射して石碑に映ゆる花八手
廃校に八手の花が威を持ちて

東京　飯室夏江

出合ひつつこぼす光や冬の雲
秋の河空に背ける青さかな
木犀の香に包まれて検査室
ママ友の井戸端会議金木犀
宿業の消しゆく祈り梨の芯

大阪　飯塚智恵子

木の葉散る色鮮やかな絵手紙に
初時雨カフェで談笑ペアルック
木の葉散る新芽吹くにも命有り
初時雨宇宙の色も輝いて
初時雨小さき亀も首すくめ

さいたま　落合和枝

青空や人待ち顔のあけびかな
いつの間に黒くなりつつなつめの実
冬ざくらひと雨ごとに白くなり
ささんかの紅散る朝の通学路
びわの花誰を待つのか満開に

鬼石　加藤ナヲ子

本を読む夜の幸せホットドリンク
雨の中歩き通してホットドリンク
冬ざれの並木路走る中学生
冬ざれの庭に野良猫うづくまる
誰一人なき公園や冬ざるる

さいたま　高原和子

しぐるるや我が道をひた歩むのみ
四回の美術展終へ冬浅し
落葉踏み吾子久々に帰宅せり
立冬の朝光思ひ新たなる
蟠り解けつつ冬日珈琲ブレイク

宮代　関谷多美子

耳たぶの手触りありぬ姫椿
キムタクの信長出陣蒼鷹（もろがへり）
山茶花やエンディングノート仕上げねば
達磨寺の「ころんだ競技」花八つ手
冬かぼちゃ叩けば夫の腹鼓

和歌山　髙橋満耶子

吉報の山茶花咲くを待ち焦がる
からみつく高層ビルの蔦紅葉
落葉山顔だけだす子につこりと
山茶花や会ひたき人に会へし年
石蕗の花居場所変へては生々と

南條きわゑ

浮寝鳥難民列車あてもなし　さいたま　糸井しるく
浮寝鳥漂泊の夜の山頭火
富士の峰裾野を延ばし枯野風
蜂屋柿今年は一個か吊し柿
「大丈夫」と丸き眼玻璃に守宮かな

新米をふはり手にとり塩むすび　川崎　鈴木玲子
新米や袋に里のキャンペーン
整体の大き手のひら冬浅し
雑穀米かをり仄かに冬浅し
旧李王家の屋敷が凜と冬浅し

鵙の声はつきり物言ふ娘と同居　藤沢　小島喜代子
鵙の贄年月書き込む非常食
補聴器は御機嫌ななめ時雨来る
艇庫閉づ音に顔あぐる月見草
小春日や自分で切れし足の爪

サボテンを部屋に移して冬構　さいたま　北出久美子
窓の辺に一の字に寝る猫小春
ボール追ひ転げる子犬小春空
山小屋の板戸打ちつけ冬構
一枚脱いで小春の坂を老夫婦

新蕎麦の幟が誘ふ道の駅　若狭　畠中八重子
草紅葉池塘は鏡のごとくなり
裸木となりて見透す余呉の湖
冬の山耐へぬくすべを授かりし

蹼やダム湖の鴨の澄まし顔　松村登美江
仕舞はれし墓所に降り積む枯葉かな
幼な子や音出る靴で枯葉踏む
枯葉道踏む音のみぞ通り過ぐ

ザッザッザ霜晴を行く登校班　さいたま　鈴木敦子
びしよ濡れの靴や笑顔の霜の朝
昼食のアヒージョ囲む霜日和
窓外の一面の野や霜の声

空澄め り最上階のクレーン車　岡田芳春
余韻なく木の実落つ音埋もれけり
起きるのに少しの決意今朝の冬
山茶花の通学路往くはしやぎ声

空見上げアンデス想ふ檻の鷹　小田美智
背を伸ばし上野の森を見張る鷹
霜に耐へ甘みを増やす菜つ葉かな
シャッターチャンス霜の白粉溶けぬうち

柘榴熟れ天女舞ふかに母の郷　さいたま　森美枝子
シャネル着る柴犬を抱くそぞろ寒
月山の秘湯に癒す菊膾
今朝の冬インターホンに顔半分

庭園の植木屋の声冬支度　武田重子
雪蛍夫と重ぬるや五十路の子
寒空や外灯の下占ひ師
冬びより電車横目の遠歩き

木枯や奴のごとくレジ袋　緒方みき子
凩や留守番の夜の日替り膳
四半世紀愚痴も言はずと花八手
砂利道によろけし先の花八手

福笹を大工頭として受くる　古池恵里子
凍豆腐信濃の星の輝きに
獣道らしき辺りへ寒施行
ぬきに出る大根そむる夕日かな

星月夜スマホ光りて人心地　寺町知子
露光り縁に竦む足の先
鎌倉の谷戸の冬空舞ふとんび

金の箱バレンタインの日に送る　所沢　関根千恵
早春の風「マネキン」の頁繰る
三匹の子ぶた蛙の目借時

幼な日や冬の台風襲来す　藤沢　藤田寛二
風雪や予想外れて胸を撫づ
初旅や阿武隈川に牛流る

水明通信

浪速通信「住めば都」　由良ゆら女

わが家は大阪市内十一階建てマンションの一階小さな庭がある。ある日帰宅するとベランダに子犬ほどの茶色いものが「お帰り」というように立ち上がってこちらを見ている。とても可愛い。鼬だ。何故こんな所に？　先日近所の方が「不要な毛布を庭に出したら鼬がそれにくるまって寝てました」と。そんな人間くさい鼬見たかったなあ。地下0号室の住人か。ま、お互い様住めば都、平和に暮らしましょう。

するすると夢に出入りのいたちかな　ゆら女

作品評

山本鬼之介

冬の靄湖底にねむる罔象女　　新　暦文

罔象女は「罔象女神」として日本書紀に、「弥都波能売神」で古事記に表されているそうで、神社の祭神としては「水波能売命」と呼称されている。一口で言えば「水を司る神」である。人が生きてゆくためには水が不可欠である。こんこんと湧き出る泉は清純な乙女を連想させるが、女神の身体から湧き出る泉を想定して生まれた神が罔象女神である。何れにしても神話が基になっている神の名であり、掲句自体に奥ゆかしい雰囲気を感じる。

「湖底にねむる」のフレーズからは、北海道阿寒湖の毬藻を、また、靄からは摩周湖の霧を連想するが、眠りの主を女神にしたことで、物語性という奥行が生まれたと思う。それにしても、作者と罔象女神との出会いの経緯を知りたいものだ。

江ノ電のワイパー忙し夕時雨　　梅澤輝翠

江ノ島電鉄の愛称「江ノ電」は、藤沢駅から鎌倉駅の10㎞を走る全線単線の路線である。駅数は15駅で最高時速は45㎞で遅く、駅間の所要時間は1分～4分で一般の鉄道路線に比べて距離が短い。これらの要件が多くの人に親しまれる要因なのだろう。両脇の人家を擦り抜けるように走る所やかなりの急カーブの箇所、そして、海沿いに走るコースなど、10㎞の間に変化が多く、大人も子供も充分楽しめる。

さて、俄に降り出した冬の雨だろうか、夕暮の鎌倉辺りを想定するとなかなか乙な雰囲気である。ただ、ぱたぱたと忙しなく動く運転席のワイパーがそのムードを壊すようだが、一方で遊園地の子供電車のような愛らしさがあって、小さな旅の想い出を作ってくれたのだろう。

冬ざれや路地の奥よりサキソフォン　　池田珪子

路地の奥の家の中から、甘く切なく心を揺らしとかすようなサキソフォンの音色が聞こえてくる。冬も深まり、家々の木々や偶に通る人の姿にも寒々しさが漂っているが、それを和らげ包み込むような曲である。奏者はどのような人なのか、関心が高まってゆく。

磴百段のぼり切る間の時雨かな　　横山君夫

この「磴」の一文字が、その場の雰囲気を実に上手く表し

ていると思う。石段とか石の階段では神聖な場所の味わいが出てこない。おそらく高所にある神社か寺院であろう。直線状の百段は、見上げただけで難儀さを感じてしまう。老若男女それぞれによって、百段を登り切る時間に違いがあるが、一時間もかかることはなかろうから、「のぼり切る間」が時雨の特徴をよく捉えていると思う。

ランナーの追風となれ木枯よ　越田栄子

冬季のマラソンや駅伝は、暑い時期に比べればよいのだろうが、木枯が吹き荒ぶコンディションの中ではかなり厳しいのではなかろうか。沿道の観戦者の誰もが、過酷な気象条件の中を力走している選手を応援している。「追風となれ」、実に簡潔で力強いメッセージである。

石庭の余白の妙や冬の空　反町修

石庭は主に石や岩で構成された日本庭園で、京都・龍安寺の枯山水の石庭が最も有名である。石庭を墨書に譬えれば、文字の部分が石や岩であり、文字以外の部分＝余白が白砂ということになろうか。作者はこの余白の部分に石庭本来の美を感じているように思えるが、余白に対する筆者の解釈が間違っているとすれば論外の評になってしまう。冬の空が石庭の演出効果を高めている。

珍客のひ孫迎へて小六月　清水桂子

十一月の暖かな陽光が射し込む部屋に曽孫を迎えて曽祖母が大奮闘している。久しく赤子に接していなかったひいばばの嬉しさと困惑とが入り交じった複雑な心情が、珍客という言葉に現れている。珍客がお帰りになった後、ぐったりしてひと眠りしたことであろう。

看板は「質屋すぐそこ」一葉忌　渋谷きいち

カードで簡単に借金できる現今でも、江戸時代から延々と続いている質屋が健在である。街中の目立たぬの路地の奥に質屋の入口があり、偶に客の出入りがある。路地の入口近くの電柱に、「質屋すぐそこ」の案内がある。樋口一葉の住まいの近くにも当然質屋があったことであろうし、一葉も通ったかも知れない。忌の俳句としてはなかなか垢抜けした作品である。

凩に押され行きつく縄のれん　篠﨑紀子

店内の清掃が行き届き、ぴかぴかに磨き抜かれた板場や飯台と、入口に本物の縄暖簾が掛かっている本格派の居酒屋は、今では殆どその姿を消してしまったが、もしそのような店があれば、風雨を厭わず訪ねてみたいと思う。凩がよき案内人

である。

この橋を渡れば異界雪ばんば　　染谷風子

筆者は経験してないが、霊的な場所すなわちミステリースポットと呼ばれている場所があるようだ。本句の橋もその一つであろうか。山中にある古びた吊橋と折から出現した綿虫とが相俟って、異次元の様相を為しつつある。

公園に残る酒壜冬の雨　　元田亮一

季節は冬、そして、天候は雨、（おそらく）ベンチの隅に転がっているのは空になった酒の四合壜。どう見ても陰鬱な景であることに間違いない。作者が何時の日か何処かで眼にした情景であるのかも知れないが、敢えてそれを俳句に詠んだ気持を評価したい。筆者の脳中には、公園で酒壜を空にした人物像が朧気に浮かんでくるが、作者はそれをかなり正確に捉えているように思える。

落葉風回転ドアを押す女　　小林京子

一口に回転ドアと言ってもいろいろな形式があり、想像以上に多くの建物に施設されていることが判った。筆者も過去に何回か回転ドアを経験したが、スマートに入出するのが難しかった。街路樹の落葉が風に舞っている。いま落葉と共に、鍔広の冬帽子を被り冬コートをシックに着こなした女性が、ホテルの回転ドアを入ろうとしている。これからどのようなドラマが展開するのだろう。

冬服の隠しに潜む電話メモ　　菅原真理

単なるポケットを「隠し」と表現したことで妙味のある俳句になった。冬服の判りにくい場所に付けられているポケットなのだと思う。他人には見られたくない電話番号を書いたメモである。冬服の主が女性か男性かで話の展開が違ってくるし、夫の隠しにあったメモを妻が発見したと仮定するとさらに複雑な話になってくる。「潜む」が恰も人間のようで秘密を増幅させている。

黄落や車椅子押す妻のひと息　　阿部幸代

身体の不自由な夫を乗せた車椅子を妻が押して遊歩道を進み公園に入って行く。銀杏落葉が園内を黄金の絨毯のように敷き詰め見事な景観をなしている。園内には緩い上り坂もあり、段差のある場所もあってなかなかの力仕事である。下七の「妻のひと息」が夫を支える妻の底力を示している。

失せ物にかまくる夜や隙間風　　丸屋詠子

毎日のように使っているものを見失うと実に気になるもの

で、その内に出てくると思っても他のことが手に付かず、必死に探すことがある。作者も同様の心境で家の中を独楽鼠のように歩き回っているのである。隙間風がその人の苛立ちを逆撫でするかのようである。

冬耕を終へし黒土陽とあそぶ　山岸久美子

田畑の二毛作のための準備や、一毛作の田畑の除草や土壌改良などの目的で行う冬耕であるが、現今では多くが機械化されたようだ。どちらにしても掘り返された土は生き生きとして冬の太陽を吸収する。「陽とあそぶ」と詠んだ作者の詩心に賛辞を贈る。

遠野へとSL「銀河」枯野行く　西幅公子

夢とロマンに包まれた遠野と、宮澤賢治の童話「銀河鉄道の夜」とを重ねたSL銀河号の融合が快い。枯野が架空の世界を実の世界へ結び付けている。

灯油売ゆつくり冬を曳きずり来　本橋稀香

童謡の曲を鳴らしながら低速で住宅街を走る灯油販売車。在宅の人々は、その曲を聞きながら冬の到来を感じ取るのである。自分の家に近づいてきて、また次第に遠離ってゆく。

冬めくや飛行機雲の筋二つ　村杉清吉

雲の無い冬の青空にくっきりと伸びてゆく飛行機雲を眺めていると雄大な気分になる。偶に雲が二本になったり、交叉することもあって楽しい。少年の心に戻るひと時である。

凩や津軽じよんがら絃高く　新井孝麿

太棹の絃を撥で叩くように弾く津軽じょんがら節を、一度聴いたらやみつきになる。凩の吹き荒ぶ陸奥の夜。凩に負けじと太棹を打ち鳴らす奏者と窓硝子を叩く凩。どちらも必死である。

写真屋の宥め笑はす七五三　岡田宣子

写真館で七五三（しめいわい）祝の家族写真の撮影中。三歳の男児であろうか、すこぶる機嫌が悪く、両親と兄姉が困り果てている。そこは手慣れた写真屋さん、百面相の芸でその児を笑わせて目出度く撮影完了となりました。

湯豆腐や落し所を知つてをり　新井のり子

湯豆腐鍋を挟んで二人の話し合いが続いている。妥協点は互いに理解しているようで、程なく決着がついて乾杯。

水琴窟

（水明集十二月号鑑賞）

池田雅夫

濁流の砕く橋脚野分かな　岡田宣子

近年の異常気象、温暖化による集中豪雨は、短時間にけたはずれの雨量を計測し被害も甚大である。台風においても同様で、川の氾濫、決壊が相次いでいる。流されて無惨な橋の痕。「濁流の砕く橋脚」がその破壊力を物語っている。

うたた寝の母の福耳白木槿　森美枝子

ご高齢のお母様と同居されているのだろう。毎日規則正しい生活の中で、「うたた寝」も日課となっている。身のまわりに気を配り体調を気遣う。ふと、うたた寝の母を見れば、なんともりっぱな「福耳」である。木槿の花言葉は「尊敬」。

虫時雨いよよ佳境の捕物帖　鈴木玲子

「捕物帖」をどう理解したら「虫時雨」に結びつくのだろうか。時代劇の一場面かも知れない。あるいは捕物帖の小説を読んでいるのだろうか。秋の夜長は読書に格好の時間だ。もし仮に捕物帖を「夜想曲」としても趣があると思う。

山の端に流星ひとつ落ちにけり　仲田利子

大気の澄む秋の夜は「流星」が多く見られる。そのほとんどが地上に届くまえに燃え尽きてしまうが、稀に隕石となって落ちてくることもある。実際には落ちていないのだろうが。

高原の風を感じて秋の草　野村美子

爽やかに高原を渡る風。「感じて」が己自身が感じたのか、「秋の草」が感じたとも受けとれる。いずれにせよ、抽象的な表現である。高原を彩る秋の草に囲まれ、楽しさ、淋しさなどさまざまな心境を具体的に詠むことも大切である。

独り酒庭のちちろにご返杯　鈴木藻好

「返杯」は、差された杯を呑み乾して、相手に差し返すこと。さて、秋の虫の代表的な蟋蟀、その鳴き声に趣がある。近藤一峰は〈酔えぬ酒酌めばちちろの囃しけり〉と詠んでいる。蟋蟀の声、面構えは「独り酒」に相応しいと納得した。

毎朝の靴を揃ふる夏休み　山戸美子

待ちに待った「夏休み」を迎え、外で元気に遊ぶ姿が目にうかぶ。遊び疲れて帰った日の次の朝、脱ぎっ放しの靴を几帳面に揃えているのだ。親は、自身で片付けることを学ばせている。規則正しい生活に充実した夏休みであることだろう。

新刊の紙の匂ひや秋はじめ　樋口元美

新しい本の匂いは何とも云えないいい匂いがする。インクの匂いか、あるいは紙の匂いなのか定かではないが。じっくりと書に親しもうと「新刊書」を買ってきた。ページをめくるたびに活字が躍るように語りかけてくるにちがいない。

きのこ飯家人の多き頃のこと　柳父はる

昔は家族が多く、三世代で十人以上ということも珍しくなかった。一升二升の飯でも足りないくらいであった。栗やさつまいもと同様に秋の味覚として「きのこ飯」も重宝がられた。核家族の今の時代を寂しく感じ、昔を懐かしんでいる。

夕暮れの海峡はるか鳥渡る　木村るみ子

秋になると冬鳥が北方から渡ってくる。また、春夏のころにきた夏鳥が日本で繁殖して、秋には群をなして帰ってゆく。「はるか海峡」を渡ってきたであろう、「夕暮れ」に鳥がやってきた。休みなく何千キロも飛んできた旅を労っている。

巡礼の道案内は秋茜　嶋田洋子

「巡礼」と「遍路」は混同され易い。遍路は四国八十八箇寺を巡る人々のこと。巡礼は各地の聖地霊場を巡ることで季節感がない。村から離れた霊場へ「秋茜」が案内してくれた。

剪定の音に調ふ庭九月　飯室夏江

夏のあいだ伸び放題だった庭木や草花。暑さがやわらいだころ、庭の手入れに励んでいる。小気味よい剪定鋏の音に、みるみるきれいになってゆく庭。すっきりと形づくられた庭の木や花を愛でている。仲秋の月を楽しみにしている。

虫の夜築百年の家に住み　加藤ナヲ子

「築百年」は古民家と思うが、そんなには古くなさそうだ。しかし、その歴史を思うと重みを感じる。町では五～六十年経つと建て替えることも多いが、古里の家は頑丈で大きくでんと構えている。百年前の虫の音と少しも変わらない。

もらひ風呂急ぐ夜道や虫しぐれ　山下ユリ子

農繁期などには「もらひ風呂」といって近所の家の風呂に入れさせてもらったものだ。水の便が良くなかったり沸かす手間を惜しんでお互いに助け合っていた。よその家の風呂に入れる楽しさ嬉しさが「虫しぐれ」に集約されている。

向日葵のブーケを胸に祝卒寿　伊藤保子

「向日葵のブーケ」とはさぞかし豪華なものだろう。元気に「卒寿」を迎え祝ってもらっている。その元気さに一同も励まされる。向日葵の花言葉は「崇拝、憧れ」という。

網野月を　選

山紫集

鯨潮吹く喘息の発作止まず　渋谷きいち

尾鰭まつすぐ鯨に嘘はなかりけり　鈴木玲子

世はちやんと見えます座頭鯨です　青木鶴城

深海の鯨の歌を聞く胎児　本橋稀香

鯨鯨太平洋をかき回す　元田亮一

鯨の群の後に椰子の実黒瀬川　近藤徹平

この星の命なりけり鯨飛ぶ　秋谷風舎

海原に頼るものなし鯨鳴く　山中いちい

待ち侘ぶる遠距離でんわ鯨鳴く　野田静香

鯨浮く浅き呼吸の我等かな　小林京子

鯨の名半眼さんと呼んでゐる　樋口元美

——以上特選

入江に鯨迷ひ子か徘徊か　曲淵徹雄

潮を吹く練習中です鯨の子　正木萬蝶

打ち上がる迷ひ鯨の弱る様　町野広子

海昏し仔づれ鯨の眠るころ　松井由紀子

競り落とす鯨尾の身にある活気　松宮保人

身を反らせ空飛ぶ鯨熊野灘　丸山マスミ　海渡る座頭鯨の恋の歌　横山礼子

給食の鯨肉話題に同窓会　宮崎紫水　鯨追ふ男太地の三代目　新　暦文

寄り添ひし鯨の歌の響きけり　宮崎チアキ　なにもかも大き鯨に見入るヒト　阿部幸代

領海も気にせぬ親子鯨かな　森　和子　潮吹きて喚声上り鯨立つ　新井孝麿

穏やかな湾に鯨の迷ひ込む　森川義子　給食の鯨に泣きし戦後つ子　荒井倶子

なつかしや給食鯨竜田揚　森下美智枝　悠悠と揚揚とゆく鯨ゆく　飯田忠男

迷ひ鯨砂を褥の目に泪　森美枝子　脱藩の竜馬の太刀や鯨汁　池田珪子

気が滅入る日のシャキシャキと鯨鍋　森本早苗　沖つ波あれは鯨の大ジャンプ　池田雅夫

鯨食べ生き延びし日も遠くなり　山岸弘子　鯨鍋ふるまひ人は海賊船　石田慶子

呉服屋の店頭鯨尺二本　山下ユリ子　泣いてゐる眸で笑ふ鯨かな　石川理恵

潮を吹く鯨は海を盛りあげて　山田美佐尾　混沌の戦後彷彿鯨鍋　井関礼子

給食の鯨肉話題夕食時　湯浅　和　鯨肉へ庖丁入れる漢意気　井上燈女

水族館に君を呼ぶ声鯨鳴く　井口俊晴

遠見でも鯨の姿ヒヤリとす　上戸千津子

海は船子の庭ホエールウォッチング　内田恵子

同胞と差し交はす夜はくぢらの刺身　梅澤輝翠

太地の捕鯨くぢらの妻と子の鳴けり　梅澤佐江

鯨浮くときどき雲とつながれり　大塚茂子

まづ御神酒掛けて祝へり初鯨　大場順子

なす術のなし湾にさ迷ふ鯨守る　岡田宣子

鯨鳴く哀しかりけり愛しかりけり　奥山粉雪

捕鯨船「なむのこばた」と横書きに　加藤でん治

鯨幕張る人達は皆無言　川村　治

双眼鏡くぢらの群れを捕らへたり　熊倉千重子

蒼天に尾鰭突つ立て黒鯨　河野はるみ

翻す鯨の尾鰭大歓声　小駒さち子

守りたきものに鯨の母性愛　越田栄子

初にみる鯨刺身のおもてなし　後藤綾子

浜人の鯨解体大のこで　榊原聰子

清貧や肉の代用鯨肉　佐々木史女

酒うまし鯨の刺身当てとして　笹本啓子

くぢら汁啜れば昭和の顔となり　佐藤克之

黒潮の怒涛の波へ鯨行く　篠﨑紀子

月蝕の鯨しづかに海の底　下川光子

旨きもの大和しぐれの鯨かな　菅原卓郎

潮を吹き鯨やうやう哺乳類　菅原真理

夜と昼と鯨どちらの海愛す　杉浦理恵　胃袋に鯨満たしぬ昭和の子　飛永　鼓

潮満ちて子鯨沖に引き戻す　鈴木藻好　平和主義の鯨の旅は悠悠と　外村紀子

命懸けていさな追ひしもお国柄　諏訪サヨ子　高台に鯨の碑ある男鹿の海　仲田利子

九州は風光明媚鯨旨し　関谷多美子　いにしへの人を偲びし鯨鍋　南條きわゑ

親撃ちし船の後追ひ鯨の子　瀬戸雄二郎　高浪や南紀の海に鯨はね　西浦千枝子

妻を呼ぶ座頭鯨の歌あはれ　染谷風子　子鯨のちよんと貼りつく母の腹　西幅公子

北海へ鯨親子の長き旅　反町　修　空飛ぶを夢見てをりし鯨かな　野口和子

潮吹きて領海知らす鯨かな　高島寛治　旅の夕ひろめ市場の鯨汁　野村美子

太地町の沖を悠々鯨かな　髙橋満耶子　セミクジラ提琴の弓かざる髭　原田秀子

思ひ出の戦後給食鯨かな　武田重子　潮吹や鯨時間のゆつたりと　日髙道を

旅の夜や鯨料理に悦に入る　田中章嘉　消えさうで消えぬ電球鯨肉　檜鼻ことは

鯨来て湾を放れず沖の石　鳥羽和風　ベーコンも大和煮も夢鯨跳ぶ　福田千春

鯨帯辰巳芸者の気つぷかな　藤澤喜久

ガリバーの横たはるごと大鯨　保坂翔太

幾度も外に出で仰ぐ後の月　井関礼子

供ふるは残る生り物後の月　菅原卓郎

山紫集作品評

網野月を

鯨潮吹く喘息の発作止まず　渋谷きいち

「潮吹く」のは「鯨」だが、「喘息」は作者ご自身か第三者かは不明である。主語述語のリフレインというスッキリとした構成に句意の奥深さが秘められているようだ。破調のリズムの中に喘息の症状が象徴的に表れている。秀句である。

尾鰭まつすぐ鯨に嘘はなかりけり　鈴木玲子

季語「鯨」というものの属性の一つに強大なもの、強いものがある。その「鯨」には決して嘘はないのである。座五の「なかりけり」という丁寧に言い切った措辞が句の格調を確固たるものとしている。

世はちやんと見えます座頭鯨です　青木鶴城

座五の「座頭」から「見えます」を解釈すれば、言葉遊びの延長線上に句を捉えたことになるであろう。それは作者の罠にはまってしまうことなのである。「座頭鯨」の名称はその形態が琵琶に似ていることに由縁する。作者の意図は無常観に拠る「世」への透視を目論んでいるように考えられないであろうか。読みすぎかもしれないが、「鯨」の新味を探った句のように思えるのである。

深海の鯨の歌を聞く胎児　本橋稀香

「深海の鯨の歌」は虚であろうか。それでも種類によっては三千メートル以上潜水する例もあるようだが、「深海」とまでは言えないのではあるまいか。ただ座五に「聞く胎児」とあるので、これは物理的な議論をすることではないのであろう。「胎児」は、母親の胎内というミクロコスモスの世界に生きているのであろうから。

鯨鯨太平洋をかき回す　元田亮一

構想の大なるを好として、最たる句であろう。「鯨」をシンボルとして形而した際の一種の憧れの様なものが感じ取れる一句である。これは作者が、クジラに対してリスペクトしている証左ではないだろうか。上五の「鯨鯨」は複数形のようにも考えられるが、筆者はクジラへの呼びかけのように読んだ。そして「洋」は、大西洋でもインド洋でもいけないのである。日本人はやはり「太平洋」なのである。

鯨の群の後に椰子の実黒瀬川　近藤徹平

中七座五の「椰子の実」「黒瀬川」と続くリズムの良さもさることながら、南洋の息吹がクジラに曳かれて日本列島に引き寄せられているようである。地球規模の大きな景の句である。「黒瀬川」は黒潮のことであろう。世界二大海流の一であり、地球の転向力によって生み出されるとものの本にあるが、人力を超えた壮大な自然の力によって「鯨の群」も「椰子の実」も「黒瀬川」も支配されている。

この星の命なりけり鯨飛ぶ　秋谷風舎

「鯨」は「この星の命なりけり」と作者は言うのである。既に人間を見放してしまっている。ここまで言い切ってしまう潔さは返って爽快である。加えて座五の「鯨飛ぶ（ブリーチング）」はその爽快さをより倍増させているようだ。地球上の最大生物に代表させて、人類以外の生物すべてを「命」と宣言しているように読める。

海原に頼るものなし鯨鳴く　山中いちい

掲句の場合、座五の季語「鯨」のイメージは、大海原にあって自然の厳しさを勝ち抜く存在である。家族をなしていることが多いのだが、孤高なキャラバン隊のようである。季語「鯨」の本意・本情は、かつては魚としての捉え方が多かったようだが、昨今は知能の高い生きものとしての捉え方が強くなったと言えるだろう。中七の「頼るものなし」はそうしたクジラのイメージを膨らませて、叙述している。

待ち侘ぶる遠距離でんわ鯨鳴く　野田静香

上五中七の句意と座五の季語「鯨鳴く」が微妙な関係性を有しているように考えられる。「遠距離でんわ」は嘗て、大切な連絡の手段であった。故郷と出稼ぎ者、実家と下宿学生、遠距離恋愛の恋人同士などなどにとってはである。時代が下ると日本と海外などの場合も多くなる。「鯨鳴く」は、「待ち侘ぶる」人間の心の叫びでもあり、また待つ人へ電話するかける者の遠い声でもある。

鯨浮く浅き呼吸の我等かな　小林京子

クジラの潜水時間は種類によって異なるようである。一分から十分程度のものから、マッコウクジラなどは九十分もの長時間潜水出来るようだ。掲句の場合は、長い潜水をするクジラのことであろう。文字通り深い呼吸をして潜水するのである。「呼吸」の深さは、深遠なものだ。上五の「鯨浮く」の季語の取り扱い方が、巧妙である。

マスク生活が続いて、呼吸が浅くなったと新聞記事で読んだ。クジラには及ばないが、深い呼吸を取り戻したいものである。

鯨の名半眼さんと呼んでゐる　樋口元美

「鯨」の目元の特徴は、将に「半眼さん」であろう。目蓋と言っていいのか分からないが、上目蓋が眼球に被っている印象が強い。実際には、クジラの種類によって異なるようだが、クジラの似顔絵を描くなら、目元の特徴として、「半眼さん」に描くであろう。掲句の場合、特定の「鯨」を読んでいるのか、一般的に「鯨」を読んでいるのか不明だが、もしかしたら幼児語か、子供言葉の類なのかも知れない。

大村節代　選

鼓笛集

落葉風知覧の遺書に乱れ無し
名人の何故逝き急ぐ寒椿
文も無き郵便受けに冬紅葉

新　暦文

勘定は串の数なり備長炭
腰うかせ屋台の端のおでんかな
年忘締めは新宿三丁目

渋谷きいち

じよんがらの路上ライブに落葉舞ふ
かき抱く太棹冬を呼ぶ男
足止めて聞き入る人も冬帽子

本橋稀香

湯豆腐の湯気にのりたる艶ばなし
悪童のひとみかがやく焚火かな
街路樹のわれもわれもと黄落期

菅原卓郎

栗おこは蒸籠の湯気に朝日さす
新松子白寿の耳にエメラルド
赤城より一直線に冬来たる

池田珪子

茶の花の陽あたる坂を車椅子
「ホーイヨホ」爺に群れ来る大白鳥
立ち上がりいつぱいに羽大白鳥

西幅公子

京都路を襷受け継ぐ師走かな
こはごはと熾火の跡を冬至祭
しぐるるや秘湯の宿の露天風呂

村杉清吉

暮れ早し一陽来復明日からは
寒四郎道標なる一つ星
いかのぼり子供と揚げる爺の顔

飯田忠男

二階より暫し見てゐる十二月
をのこ皆棒切れが好き十二月
数へ日や呪文かけたき家事リスト

落ちさうな赤子のまぶた小六月
影追ひて影に追はるる小夜時雨
冬夕焼影絵のごとく人の過ぐ

灰色の空を突き刺す冬木かな
灰皿を夫の土産に冬の旅
枯園を子等大声で駆け回る

金婚の四国ぐるりと冬の旅
息白しこはごはやつとかずら橋
冬の川の深き渓谷遊覧船

ふる里の裏山に吠ゆ虎落笛
ふる里の夜空は凛と冬銀河
枯尾花星夜の風にきらめけり

学童の下校池の面浮寝鳥
母たちの想母記集を読む師走
サンタクロースのお揃ひ帽子兄おとと

森　和子

桐一葉ふはりと落つる山の径
朝寒の水滴の筋一本
黄落や小気味よきほど降りにけり

佐藤克之

山茶花の蕾に願ひ託したき
亀五匹重なり合ひて秋の川
何処から餌求め来る冬雀

高原和子

森下美智枝

☆　☆

山岸久美子

関谷多美子

奥山粉雪

南條きわゑ

鼓笛集作品評

大村節代

落葉風知覧の遺書に乱れ無し　新　暦文

鹿児島県南九州市の「知覧」は、かつて特攻の出撃地である。特攻の前夜は、最後の晩餐をして、戦場を目ざし飛び立つ。知覧特攻平和会館には、特攻隊員達の遺書や遺族への手紙が陳列されている。未成年の特攻隊員を思うと涙なしでは読めない。しかし掲句の「遺書に乱れ無し」により、特攻隊員の覚悟の程が改めてじんときて、頭を垂れた。

勘定は串の数なり備長炭　渋谷きいち

新型コロナによって、屋台で一杯の楽しさが失われて久しい。しかし、近頃また、人々が戻ったとか。備長炭と串の数で焼鳥屋の赤提灯が浮ぶ。並べた串と空になった徳利が増えた。さあ、そろそろ御開きにしようか。

じよんがらの路上ライブに落葉舞ふ　本橋稀香

津軽地方に伝わるじょんがら節は、津軽三味線――太棹の伴奏によって、力強さと哀調が増す。

三句が良く纏まり、路上ライブの様子が伝わる。

鼓笛集巻頭（一月号）

私の好きな一句（自句自解）　梅澤輝翠

北国の祝言の帰路冬昴

新しい年に祝言がありました。

雪は止み凍てつく足元はゴムのエナメルの長靴。少々ちどり足なれど、手にした寿の引出物もしっかり持ち、仲人をつとめた夜はどこまでも冴え渡り、ふと見上げた空には若い二人の門出を祝うがごとく冬の昴が光輝いている。幸せな帰路でした。

『俳壇』一月号
特集　わが誌の創刊号を読む

■「水明」創刊号（昭和五・九）を読む

悠久の旅路
――「水明」創刊への決意

山本鬼之介

大正九年九月、立体俳句論を基盤とする「枯野」を創刊、高濱虚子の「ホトトギス」を離れて独立し、一躍俳壇にその名を馳せた長谷川零余子が、昭和三年七月二十七日に志半ばで急逝した。残された長谷川かな女の身に、零余子と共に過ごしてきた想い出多い新宿柏木の家が全焼するという悲運が重なり、同年十一月、住み慣れた東京を離れて縁者を頼って終生の地となる浦和に居を移した。

零余子亡き後、「枯野」は「ぬかご」と改題され、雑詠の選をかな女ほか一名の二人体制で行ってきたが、かな女を正統とする旧「枯野」信奉者の並々ならぬ熱意とかな女の決意により、昭和五年九月一日に待ちに待った「水明」が創刊された。かな女四十三歳の年である。

先ず創刊號の表紙であるが、「水明」の右書きの題字と丹波酸漿の絵がかな女の筆によるもので、質素で素朴ではあるが、苦労の末に創刊にこぎ着けた発起人面々の心の内を反映しているかのように思える。では、創刊號の中を覗いてみよう。

一頁には、かな女の近詠三句が載っている。

ひとり居を葉月の松のしたしけれ
夏痩せて白き薔薇をもて來たり
紫の花白き花このみ秋立ちし

今とはまったく違って、閑静そのものであったと思われる浦和と、かな女宅の庭の松が偲ばれる。白ばらを携えて俳句仲間の女客が訪れたのか、相手を気遣うかな女の繊細な心根が伝わってくる。「紫の花」はかな女の好きな龍膽であろう。さて「白き花」は……。

二頁は、「悠久の旅へー發刊の辞ー」と題する澤本知水の心血を注いで「水明」の発刊を成し遂げた心の丈で埋められているが、かな女擁立派の中で最も力を尽くしたのが「水明」の発行責任者となった澤本知水であった。因みに、澤本知水は筆者の伯父で、男子に恵まれなかった伯父に大変可愛がられた。その伯父の名文を此処に全文転載する。

向日葵が燃えてゐるー。

粗末な一本の洋傘を抱へて、果てもない悠久の旅に私は立つのです。行程も準備も無い、すべては不用意なこの旅立ちに就いて、私の周囲の友だちは、いろ〳〵心配して呉れる。私は其の厚意に對して、たゞ微笑を以て答へました。この見すぼらしい私といふ旅人は、何を目的に、この定めない旅を企てたのであろう。それは私にも解らない。たゞ、山川草木の中に身を打ち込むことに依つて、先師故零余子先生の藝術と、たましひが見たいといふ念願が、私をこの果てもない旅に馳り出したのです。たゞ私は足に任せて、とぼ〳〵と歩いて行かうと思ひます。其處には恐らく、あらゆる艱難が、私を待ち設けてゐることでせう。だが、その艱難の中に身を打ち込んでこそ法悦は生れやう。求めるものは、かくて與へられるであらう。若し、この極みない旅が、輝かしい歸路に向つてくるときがあれば、その時こそは、生ける零余子を見て來た時でせう。私はそれを神に念願しつゝ一個の修行者として、艱難の旅路に靴を鳴らして行かねばなりません。

（五・八・一〇）

右の文章の通り、零余子の藝術の灯を消してはならぬとの思いで厳しい船出をした「水明」であったが、その真摯な気持が全国の俳人に伝わり、多くの人が次々と「水明」に加わって見る間に大所帯になったという。現状と比べて夢のような話である。

昭和五年十一月には、「新たにかな女先生を主幹として」というタイトルの文書が全会員に配布され、「水明は明年一月號を期とし、かな女先生が主幹として經營させられることになりました。」と宣言した。

斯かる過程で出発した「水明」が、昭和・平成・令和と、三代に亘る荒波に揉まれながらも九十余年の歳月を生き続けてこられた幸運を、今ここに第五代主宰としてしみじみと実感している。

水明の記事掲載他誌より転載

『門』十二月号
一誌一会　田中洋子

「水明」九月号

昭和五年九月、長谷川かな女が、現在のさいたま市浦和区で創刊。平成三十年、山本鬼之介氏が第五代主宰に就任。季語を入れて自己の個性を生かした俳句を詠む。

「通ひ人」八句より　山本鬼之介

折鶴の羽に入魂秋立つ日
少将といへば「深草」秋螢
名園の殿方用やつくつくし
小野小町に恋して九十九夜通った悲恋の深草少将など句材の奥行きが深い。

◇冠木門（主宰作品の鑑賞）　境　延昭

山は力を河は情けを愛鳥日（六月号）
重畳や地場の鰻と里景色（七月号）
山と河は日本の詩歌のアニミズムの根源。二句目は重畳（ちょうじょう）という上五が決め手。と鬼之介主宰の句を十句取り上げて鑑賞。

◇硯箱〈季音七月〉　井口俊晴

深夜便ノイズざらざら五月闇　西山貴美子

◇季音〈雪・月・花〉

アイスキャンデー画鋲跡ある婆の店　大村節代
土器を五湖一望に雲の峰　松宮保人
天道虫逃げて少女はまた独り　笹本啓子

◇創刊百周年に向かって

「全国大会の記」　井口俊晴

「皆さん、かな女のように自由な発想で各自の個性を活かした俳句を作ってください。」と鬼之介主宰が挨拶。

◇水明全国大会〈兼題〉行く春・燕・大　山本鬼之介選

天　つばくらめ城跡と言ふ石三つ　鳥羽和風
地　大将も副将も泣き卒業す　五明　昇
人　行く春や義母の形見のよろけ縞　正木萬蝶

◇水明集　山本鬼之介選

草に寝て草を旅する蝸牛　本橋稀香
大阪やみな飛脚めく夏帽子　遠藤人美
乙女ゐて炭酸水をこぼしけり　吉川拓真

この作品評にて鬼之介主宰が蝸牛を種田山頭火を思わせるとしたことに納得した。

◇水琴窟（水明集七月号鑑賞）　池田雅夫選

風向きを捉ふる仔馬耳聡し　森　和子
すてられぬ宝石箱の桜貝　川島夕峰

◇山紫集　網野月を選

梔子や酸素濃度の戻る朝　本橋稀香
抜歯後の浅き眠りや梔子咲く　石川理恵

◇鼓笛集　大村節代選

横着な自分も自分心太　元田亮一
那須連山帰らぬままの青嶺かな　杉浦理恵
青嶺が切ない。小説が一編書ける内容だ。

◇鬼之介主宰執筆の「長谷川かな女が暮らした町浦和」は町の成り立ちから解説。又、本誌の表紙の「水明」という題字もかな女の直筆。いずれもかな女への敬愛の証。

他にもエッセイや鑑賞文も多く読み応えたっぷり。末尾の吟行会の様子や結果報告、各地の例会や句会の報告など大変活発で意欲的である。

『鳰の子』十二・一月号
句集に学ぶ　松本美佐子

『永字八法』星野和葉著
東京四季出版

俳句一家の好環境のうえに、豊かな感性が思う存分発揮された第一句集である。「その時その場における自己との対象物を確りと眼にとどめ貫禄負けすることなく詠みこなしている」と、主宰の序にあるが、一句一句内容が確かな描写で詠まれている。

釣り人もボートも無言われ無言
授かりし五感全開青き踏む
万緑に丹で立ち向かふ五重塔
青年の歩幅五月を一直線

さまざまな俳句は怠ることなく磨かれ、作者の夢のある世界は読者の詩嚢を大きく膨らませてくれる。

駕籠の扉の開く気配して雛の夜
さやさやと夢擦り抜ける籠枕
山茶花はらり骨董市に婚衣装
魚龍に浮く小さき鼓動春隣
小さき影動く浅春の潮溜り
末黒野に小雨葬送行進曲
灯を消して狂ふ灯蛾を手なづけぬ
蓑虫よ汝は都会派か街路樹に
亀鳴くや張り切れぬ意地通しけり
堰落ちる無音の水にある余寒
青年の歩幅五月を一直線
大らかにら抜き言葉を春着の子

＊星野紗一、光二、山本鬼之介氏「水明」三代の主宰の教えを受けられた。句集名は旧姓「永峰」から〈筆持てば永字八法白木槿〉の句より引かれた。

飴切りに空音もあり初大師
安寧とは千六本を刻む音
指先の力ゆるめて鶯餅
屋台組む男寡黙に冬帽子
名月や窓辺に明世を立たせたし
二月の忌若狭瑪瑙を身につけて
七揺れもして風知草忌を覚ゆ

句は優しく平明、ときにユーモアを交え自在に日常を詠んでいる。

『浮野』十二月号
新刊句集紹介　横田幸子

☆句集『永字八法』　星野和葉

昭和十二年旧大宮町（現）さいたま市大宮区生まれ。同五十六年「水明」入会、平成二年同人。平成九年水明賞受賞、同十一年季音賞受賞、同二十二年かな女賞受賞。現代俳句協会会員、埼玉県俳句連盟常任理事、さいたま文藝家協会理事、さいたま市浦和俳句連盟会長。

〔山本鬼之介「水明」主宰の序より〕

どの句からも句意が読者に伝わり、読者は俳句の中に夢を描く作者の心を感じ取ることであろう。俳句に日常性を取り入れることは容易であるが、そこに作者の夢を感じさせることは容易ではない。著者はその時その場における自己との対象物を確りと眼にとどめ、貫禄負けすることなく詠みこなしている。

〔自選十二句より〕

炎天を行くもしかして鬼女の顔
陶枕に夢だけ残し骨董市

水明例会

第一例会（浦和）

境　延昭
茂木和子　報

自画像は未完のままに冬の星　延　昭
射的場に湯ざめの顔が一つきり　〃
木洩れ日を掃きて完了落葉掻　喜　恵
後れ毛の耳をくすぐる湯ざめかな　〃
独り身の足より寄する湯ざめかな　亮　一
乳液の残り香甘き湯ざめかな　治　子
ヒロインの幸見届けて湯ざめかな　由紀子
完璧てふ言の葉重し寒牡丹　和　葉
——以上特選
連れ立ちて歩く坂道湯ざめせり　喜　恵
君を待ち湯ざめ口実縄暖簾　はるみ
湯ざめの手あの指切りは何だつた　延　昭
外階段に隠れたばこの湯ざめかな　マスミ
野生とは湯ざめせぬもの猿長湯　稀　香
完結編はどんでん返し年の暮　徹　平
冬晴や完成に湧く集会所　チアキ
まだ見えぬ流星群に湯ざめかな　亮　一
完全に厄を収むる年の暮　和　葉
夕星の輝き増せる湯ざめかな　順　子
極月や大河ドラマに似合ふ「完」　由紀子
完熟の柿高塀を食み出せり　治　子
湯ざめすと燥ぐ子供をたしなむる　和　子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城　報

氷海を砕きて進む南極船　サカエ
園庭を守るが如く冬木立　〃
天めざし反る枝ぶりや冬木立　士　史
三囲の社の寡黙冬木立　峰　雄
口笛で呼ばれし記憶冬木立　みどり
缶蹴りの缶の高鳴り冬木立　鶴　城
——以上特選
闇深く氷つてゐたり甕の水　道　子
独り居の点かぬ門灯冬ざるる　敏　江
冬木立縮緬皺を嘆きけり　弘　子
空碧く湖中ざわつく氷下魚釣り　則　子
骨格を晒して毅然冬木立　峰　雄
背を向けて歩み去るかに冬木立　いちい
去年の蘭ふたたび芽ぶき師走かな　サカエ
華麗なる舞を支へる氷かな　り　こ
未来指し確と根を張る冬木立　玲　子
年の果宇宙背にする白き月　士　史
冬の木や陰の私に思索なき　竺　仙
日溜りに私語交はし合ふ冬木立　みどり
枝枝の色をなくして冬木立　鶴　城

第三例会（東京）

五明　昇
曲淵徹雄　報

サーカスの幌の隙間や虎落笛　喜　久
惨敗の選挙戦ビラ虎落笛　〃
平家琵琶佳境に入るや虎落笛　順　子

峡の夜の肺腑を抉る虎落笛　康世
冬凪や入江づたひの町灯り　雅夫
骨に鬆の入る年頃虎落笛　徹雄
廃屋に主呼ぶ声か虎落笛　昇

——以上特選

明り障子のすべり調へ子を待ちぬ　理恵
悠久の興亡幾多冬銀河　星歩
一人居の我を鼓舞する虎落笛　順子
えいと買ふ五年日記の重さかな　徹雄
文机や父母のその後を虎落笛　萬蝶
古城軋む搦手門の虎落笛　喜久
幻聴の疑ひはれず虎落笛　雅夫
冬の海荒るるは虻の雄叫びか　康世
いぶりがつこを当ての独酌虎落笛　昇

第四例会（浦和）

境延昭
石井喜恵報

故郷のシャッター街や枯柳　修
恐竜の跋扈せし渓冬霞　マスミ
冬霞民話の里をすつぽりと　でん治
野生馬の駆くる山裾冬霞　恵子
枯柳元祖を名告る洋食屋　延昭
川舟の笠に影置く冬柳　昇
その辺り神様在す冬霞　光子
聞き流すことも方便枯柳　喜恵

——以上特選

硝煙遥か冬霞立つ関ヶ原　昇
住みなれし此処がふるさと冬霞　由紀子
冬柳生家に残る洪水の跡　寛治
白壁に影のゆらめく枯柳　暦文
筑波嶺にむらさきの帯冬霞　順子
掘割にネオンゆらめく枯柳　光子
湿原の遥かに池塘冬霞　玲子
冬柳撓ふ墨堤川明かり　マスミ
冬霞静かにみちる神の池　節子
古刹なる風情醸すや枯柳　でん治
冬霞見通しくもる脱炭素　修
冬霞幽かに浮くる竹生島　翔太
十万石を守りし掘割冬柳　延昭
冬霞神馬いななく杜深き　喜恵

第五例会（浦和）

梅澤佐江
河野はるみ報

里神楽泣くも笑ふも身を揺する　水尾
通過中の関東平野雪催　〃
みちのくの海の暗さよ雪催　義子
拝観料の嵩む京都の雪催　美佐尾
里神楽鬼面をとれば男前　佐江
神々の恋はおほらか里神楽　〃

——以上特選

美佐尾
水尾
理恵
義子

漬物を錦市場で雪催
雪催男結びの囲ひかな
連山白し裾野をわたる里神楽
頼もしき子役のひかる里神楽
遠望にけぶる秩父嶺雪催　玲子
鬼の衣に怯え騒ぐ子里神楽　宣子
足早に買物済ます雪催　はるみ
雪もよひ握手の温もり今もなほ　佐江

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子報

古障子に穴暗空に天王星　ひろこ
ときめきが早鐘のごと寒の紅　理恵
障子に鬼と狐鳩来て影遊び　京子
忍ぶやに障子を過ぐる人の影　鶴城
月明り洩れ来る障子穴二つ　はるみ
日の影の移ろふ静寂白障子　佐江
父母の影の濃淡白障子　萬蝶

——以上特選

座敷童の立ち去る気配白障子　マスミ
日記買ひ赤丸つける早生まれ　慶子
後ろ手に閉むる障子や憂き瞳　佐江
駅前の街角ピアノ早やクリスマス　紀子
ひそひそに耳そばだつる障子かな　鶴城
最後のページ繰る指止むる虎落笛　理恵
寒潮や早岐の瀬戸の潮の粋　はるみ
早割の旅行支援の冬青空　京子
障子の穴に見ゆる景色の秘密めき　千春
月蝕を赤しと障子開け閉てす　ひろこ
早々と顔見世触れる京の街　俊晴
切り張りの淡き色浮く冬障子　萬蝶

昔話あれこれ24

雄略天皇の妻問い（そのⅡ）

赤猪子の節操

ある時、雄略天皇が遊びに出掛け、三輪川に着いた時、川の辺で容姿の美しい童女が衣を洗っていた。

天皇はその童女に名を尋ねた。その童女は

「私の名は、引田部の赤猪子と申します。」

と答えた。天皇は

「お前はどこにも嫁にゆくな。近い内に、宮中に召し出すから。」と言って、宮殿に帰った。

そこで赤猪子は天皇のお召しの言葉を待っている内に、八十年も経ってしまった。

赤猪子は「お召しを待っている内に、長い年月が経ってしまった。私の容貌は衰えて召される望みも無い。しかし、天皇のお召しをずっと待っていた私の真心を天皇にお伝えしなければ、私の気持ちが晴れない。」と思って、沢山の結納品を持って宮殿に参上し献上した。

天皇は以前約束したことを忘れていて、

「お前はどこの婆さんかね。どうしてここに来たのか。」と尋ねた。赤猪子は、

「某年某月、天皇からお言葉を頂き、お召しの言葉をひたすらお待ち申しておりました。それから八十年も経ち、容貌もすっかり老いてしまい、今更お召しを望む気持ちもございません。しかし私の真心をお伝え申したく参上いたしました。」と答えた。

天皇はたいそう驚き、「私はそのことをすっかり忘れていた。それなのに、お前は操を守り、私の言葉を待って、空しく女盛りの年を過ごしてしまい、なんとも不憫なことだ。」と、内心では、結婚しようかとおもったが、赤猪子が年老いて結婚できないことを悲しんだ。

（赤猪子だけが年をとって、天皇は依然として若い。荒唐無稽であり、無責任な話でもある―という読み方もあろう。しかし、雄略天皇の書かれ方には、中国の神仙思想の影響があきらかで、天皇が不老不死・神通力をもった存在として、物語的に形象化されていった結果とみるべきであろう。）（『新潮古典文学集成』西宮一民氏）

（つづく　丸山マスミ）

各地句会

新樹の会（浦和）

素つぴんで赤城嵐を迎へ撃つ　徹雄
年越しの神を送るや迎へ酒　道を
手と足に摺り込む馬油寒波来ぬ　風子
寒波来ぬ鳥居の注連の新しさ　清吉
容赦なき寒波に灯す暖の燭　鶴城

櫟の会（浦和）

傷だらけそれが勲章ラガーマン　克之
葉付大根抱きてぶらぶら道の駅　富子
大根を煮ながら思ふわが半生　文子
何処からか大根（だいこ）煮る香の夕餉時　富美子
こはく色に煮つむ大根（だいこ）よ外は雨　千重子
スクラムの腿の太さやラガーマン　敦子
サラダ良し似ても更なり大根美味　亮子
女子ラガー夕日に映ゆる太き腿　朋子
ラグビーの熱き戦ひ時忘れ　妙子
ラグビー戦たられば議論果てしなく　裕誌
ラガーマンの気迫に茶の間沸きに沸く　治子

水明鬼石句会（鬼石）

干し柿に甘くなれよと空つ風　和子
羽ばたいて小鳥とまどふ初氷　ナヲ子
冬桜風に負けまい散りもせず　洋子
咳こみて白湯の一わん枕元　聡子
ふり向きて戻れぬ月日もどり花　紀子

めだか句会（浦和）

丸の内夜は変身のクリスマス　謙一
安らかに聖歌を聞いて気ままな日　宏子
雪吊や松登りたる手際良さ　六弦
沈黙のベールの園児聖夜劇　知子
小箱にも星一粒の聖夜かな　十三子
動画見て作る聖菓や十三歳　敦子
クリスマス小さきケーキで独り酒　はるみ
星一つあれば光となる聖樹　月を
急登やアイゼン確と踏み込みて　鶴城
賛美歌やチェロの響きに癒されて　美智

円卓の会（浦和）

静寂が時間を止める冬木道　道を
札納パンダ見送る飼育員　修
ポインセチア丸テーブルのティーセット　輝翠
荒星や友に背を押さるるやうに　静香
札納猫の手借るや巫女溜　翔太
マスク取るその唇に紅眩し　亮一
滝川へ小さき泉へ散紅葉　月を
山眠るひととせ包み込む如く　鶴城

神戸大池句会（神戸）

息白く小籠包の列につく　玲子
丹波道音に並ぶやポン栗店　千津子
石蕗の花耳そばだてる下校刻　早苗

水明松本句会（松本）

溜息の出さうな夜空月冴ゆる　陽子
蜜入りのりんご頬張り顎外れ　マリス
紅葉踏み見おろす先に龍神湖　玲子
山茶花や懐紙とり出す音しづか　寿子

柿の木塾（浦和）

凩や一望能登の千枚田　かつ子
禅寺のはやばや山門閉づ冬至　水尾
木枯の吹くにまかせる安普請　俊晴
安曇野に鳶の輪高き冬至晴　昇
気兼なく膝を崩して冬至粥　節代
甘く煮て冬至南瓜と言ひ聞かす　和葉
ふはふはの大きオムレツ冬至の夜　恵子
凩や関八州を一払ひ　和子

たかんな俳句会（川口）

残照をきらり浮かばせ冬の川　久美子
寄鍋のれんげ並びて客を待つ　のり子
地吹雪に舞ひ舞ひ上る滝の水　ふくみ
地方紙に包まれ葱の荷の届く　小麦
海のもの足して寄鍋盛り上がる　義子
寄鍋を囲むそれぞれ来し方を　鶴城
その昔海といふ地の石蕗の花　水尾
冬の川足音だけの太鼓橋　静香

花衣の会（浦和）

暮早し見残しの絵に心置き　みよ
短日や縁に並びし老いと犬　みち
葱刻む友の転職板につく　峯雄
深谷葱届けし人は百一歳　治
短日や避難訓練賑やかに　章嘉

若鮎句会（浦和）

灰色の街に染まらぬ石蕗の花　さなえ
石蕗の花検査結果を待つ窓辺　稀香
サッカーの惜敗ニュース石蕗の花　万美
浜風に靡くことなく石蕗の花　芳春
紅葉散る過ぎし時をも色づきて　香音子
熱燗の冷えても旨き会話かな　拓真
熱燗や鴨の代はりの飛龍頭（ひりゅうず）　月を
冬の蝶時流に乗れぬ経営者　鶴城
大漁や波頭の先に石蕗の花　喜夫

和歌山水明句会（和歌山）

その中の一人は赤シャツ漱石忌　和子
千本の鳥居を抱き山眠る　道子
パラグライダー枯野を蹴つて川越えて　千枝子
冬夕焼シャッターチャンス逃しけり　満耶子
見送りて立ち話する日向ぼこ　千世子
年の瀬や友と会話の早口に　きわゑ
独り居をほつこり包む炬燵かな　洋子
揺り起こす寒夜の夫やＰＫ戦　廸代

野ばらの会（浦和）

断捨離の若き写真や冬ぬくし　夏江
あの頃はみな痩せつぽち芋雑炊　秀子
我が膝に眠る猫ゐて冬ぬくし　栄子
雑炊や塩梅の良き夫の味　茂子
冬ぬくし玄米炊ける間の眠し　みき子

ミモザの会（横浜）

夫つくる夕飯何か冬ぬくし　亜弥子
七十歳何もしたくないね師走　由美子
何事も無き年をと祈り日記買ふ　萬蝶
幼子の擂る手伝ひや納豆汁　詠子
訛とび交ふ大鍋のけんちん汁　玲子
バラライカ流るる店の狸汁　慶子
ゆつくりと出汁ひき冬の汁深き　栄子
海に墜ちたる限りなき影十二月八日　史代
油断して葱鉄砲や根深汁　千春

水明澪つくし句会（大阪）

はくしよんと正しく発音してくさめ　洋子
静寂の淀に散りばむ冬灯　智恵子
切干の封を開くや日向の香　きりり
滋味深き初老の暮らし切干煮　人美
初霜や同時接種の両の腕　美令
老人にケトル笛吹く年の暮　ゆら女

繭の会（浦和）

鎧戸に閉店のビラ冬夕焼　風子
これなんぼまいどおほきに九条葱　風舎
冬夕焼赤子背負ひて子守歌　悦子
研ぎ上げし薄刃の薄さ葱ぷつり　まりこ
鉄の街冬夕焼に沈みたり　比早子
葱むきぬ白と言ふ色ありにけり　珪子
葱畑子等の声する通学路　トエ
汲み置きに土葱（つちねぎ）ゆらす童なり　さよ子
仲間との冬旅路程の無謀さよ　夕峰
冬夕焼背負ひて富士は影絵かな　月を
七十路の短絡回路冬の霧　鶴城
毎年よ祖母（ばば）に下知され葱ぬくは　京子

コクーンシティカルチャー俳句教室（さいたま新都心）

おでん鍋謀議なんぞは似合はない　延昭
おでん屋の焦げし菜箸ビル谷間　美枝子
冬の田へ少年が吹くトランペット　倶子
表札に家族八人枇杷の花　早都子
コンビニのおでんぶら下げ午前さま　俊晴
枇杷の花大葉の中でかくれんぼ　まき子
転勤の辞令を胸におでん酒　健司
大根をきゆきゆつと樽に押し漬ける　淑子
枇杷の花板戸に傾ぐ貸家札　昇

山茶花（浦和）

吊るさるる塩引鮭の青光り　マスミ
塩鮭をさばく父の手ごつつくて　光子
塩鮭やうすい切身のタイ定食　清一
塩鮭は弁当箱の定番か　美江子
初冬の出航のドラ重たげに　綾子

鶴川山百合句会（町田）

人参のスープ深夜の麻雀荘　雄二郎
長台詞ニンジン好きの嘘嫌ひ　月を
ポトフの人参好きと云つたばつかりに　喜久
母手作りの人参甘し夜勤明け　史代
星型の人参を添へカレー辛口　広子
喜寿のわたくし人参スティックぽりぽりと　千春
青女らの宴鎮もる草千里　萬蝶
あの人が苦手人参より苦手　理恵
細き月残し静けき霜の朝　美千子
しやわしやわと人参洗ふ山の水　玲子

蝌蚪の会（浦和）

冬桜老舗の甘き玉子焼　ひさの
シリウスは「あれよ」「これか」と親子づれ　しるく
冬桜句碑凜として輝けり　さち子
曇天に何をささやく冬桜　朝香
人知れず弁天池の冬桜　元美
冬桜峰にとりつく風の音　風舎
朝の霜解き船白く輝けり　礼子
手の届くところに咲けり冬桜　月を
冬桜資格試験の発表日　鶴城
解体の進まぬ空き家師走かな　宣子

若狭水明会（若狭）

弔砲の十九発や秋の天　寛久
谷駈けて村を閉ぢたる秋時雨　鼓
渋皮を剥くひと手間の栗ご飯　初花
朝倉の土塀濡らして秋時雨　保人
踏台で捜す土鍋や秋時雨　和風
そこはかと秋の時雨や浮御堂　ことは
包丁を研ぐ手止めたる秋時雨　郁子
踊り子は小百合天城は秋時雨　白鷺

あゆみの会（浦和）

冬木立幹に巣穴のあらはるる　和
踏み入れば風音のみの冬木立　啓子
冬木立神の庭掃く朱の袴　倶子
黒ぐろと鳥の集団冬木立　重子
冬木立鳩集まりて一休み　山遊
透き通る陽の輝きし冬木立　藻好

きざきサークル（浦和）

石蕗は黄に遠流の島の磯伝ひ　昇
妻病めばなぐさめ色に石蕗濃ゆき　光子
行く年をたれば語り鵜の岬　タイ
「舟を編む」松田龍平年の暮　喜代子
石蕗の花夫旅立ちて刻表札　和枝
行く年や窓拭き上げてワンカップ　健司
秩父路や同行二人石蕗の花　啓子
後戻り出来ぬ余生や年惜しむ　倶子
行く年や逝きたる人に心寄せ　和
音もなき雨に明るき石蕗の花　和子

光が丘俳句教室（東京）

冬至の日丸い南瓜と格闘す　はる
団地では犬猫法度漱石忌　康子
五能線最終便に雪女　典子
取り立てて何も無き日の柚子湯かな　理恵

芽吹句会（浦和）

冬晴れやぶらり古書街カレーの香　富子
カピバラと思ひは同じ冬至風呂　正子
大仏をくすぐるごとく煤払　修
懐にせせらぎ抱へ山眠る　玲子
懐に獣も抱き山眠る　チアキ
古道行く人影のなき冬木立　諒明
眠る山置き鉄道の路線案　ひろこ
佗助の奥に古風な佇ひ　千重子
藁を編む嫗の背中山眠る　道を

野菊の会（与野）

飼ひ兎雪に放てばチュチュの舞ひ　美代子
生き物係りおづおづ覗く兎小屋　和子
公園の兎を抱くや冬ぬくし　清子
大ジャンプして兎になれば雪催　まな
分校の少女の抱く白兎　知子
校舎より聖歌うさぎの耳動く　光子

りんどう句会（浦和）

旧友の安否気遣ふ年の内　寛治
お神楽の平和を招く笑ひかな　サヨ子
みかん取るべからずの札東海道　利子
知恵の輪を投げてむきだす蜜柑かな　卓郎
平和てふ日溜りに咲く冬菫　まり子
平熱に戻りし朝の七五三　君夫
年忘れ仕切るベテランひら社員　弘夫
平和かな小さき蜜柑の詰め放題　治子
行平で一人前を炊くおじや　徹雄
人気なき平城京に風花舞ふ　紀子
みかん山文左衛門の男さび　翔太
「狂」の字の踊る新聞蜜柑剥く　風子
書肆に選る好みの暦年の内　順子

雛の会（浦和）

平家谷を包む静寂冬霞　喜恵
手袋の十指自在に手話の子ら　燈女
平穏な日々を綴るや日記買ふ　輝翠
平易なる良寛の詩や冬うらら　チアキ
夕映えの静けさ纏ひ鳰の笛　佐江

青葉の会（浦和）

冬晴やまづ見定むる富士の山　美紗子
冬晴や青き秩父の山うねる　真理
ペダル踏みしまなみの橋冬日和　美智枝
浅草に客足戻り年の市　美子
冬晴や猫と座蒲団奪ひ合ひ　啓子
冬晴や群青色に筑波山　公子
甘柿の木の天辺に先客よ　洋子
冬晴や飛行機雲のただ一本　和子
五頭山に白輝くや大白鳥　輝翠

水明熊谷句会（熊谷）

冬深しいよよ火の入る登り窯　栄子
注連縄の青き香りや年の市　徹平
年の市仕事帰りに昆布下げ　正行
河豚雑炊ポン酢にむせるをんなかな　卓郎
年の市スマホに余念なき店主　秀子
買ひ疲れ人疲れして年の市　燈女
登り来る子等の声聴く冬桜　茂子

俳句の手ほどき（岩槻）

古伊万里に花びらのごと透くてつさ　佐江
枯芒研ぎ澄まされし富士を置く　水尾
遠富士の銀（しろがね）びかり枯芒　義子
「昭和」早や「明治」の響き枯芒　ます美
大晦日千里を還る五黄のとら　徹平
古里に残る屋号や雪帽子　翔太
異界の人にあらずや夜半の枯芒　幸代
里帰り二股竿で落す柚子　桂子
朽ち果てし小舟の櫂や冬芒　美子
枯芒犬の遠吠え岸向かう　延昭
築山に伍する身の丈枯尾花　卓郎
五里霧中真つ只中や年の暮　忠男
翁像の袖に縋るや枯芒　倭子
川べりをたどれば和む枯芒　久美子
植林の山に日の射す冬芒　かつ子

皐月の会（浦和）

セーターの手触りに負け強く抱く　昭一
画帳小脇の日曜画家に枯木立　光代
吉日に結ぶ縁組冬蕨　美佐尾
霜月や吉祥天に朝日さす　珪子
吉日に蜜柑着くよと電話せり　順子
黒セーター買ひ雑踏に紛れ込む　紀子
吉兆を占ふごとく風花す　静香
無花果や虫たち競ふ甘さかな　孝麿
谷中坂遠富士染めて冬夕焼　暦文
セーターを脱ぎて気付くは値札なり　きいち

りそな俳句会（浦和）

一点に定めし視線鷹飛び立つ　雅夫
滝涸れて茶店開店休業中　建治郎
水涸れて山の吐息の聞こゑけり　道を
縦に撮る快晴富士を鷹の舞ひ　寛治
水涸るやダム湖に眠る湯治宿　暦文
風捉へゆるがぬ飛翔蒼鷹　マスミ

櫻蔭句会（浦和）

修羅の空翔りきて水鳥しづか　由紀子
息白し神馬駈け上ぐ秩父の夜　茂子
隅田クルーズ水鳥じつと我を見る　美智枝
水鳥や鳥形ボートと争ふごと　千恵
シニアカートの坂一歩づつ息白し　公子
昼下がりぷかりぷかりと浮寝鳥　美子
水鳥の水尾が交差し光射す　真理
水鳥の群れてウィーン朝の沼　多美子
水鳥や風と織りなす波の紋　幸代

芙蓉句会（浦和）

柔らかな日差し枯野の華やぎぬ　正子
枯野道老犬乗せて乳母車　道子
丸薬の何処まで転ぶ冬の朝　税子
阿弥陀仏唱へて泪枯野道　仁
教会の窓より覗く枯野原　ともこ
春一番香りをのせて薬売り　文子
故郷は何処も更地や枯野原　美子

水明小川句会（小川）

野菜から立つ息白し朝の市　紫水
八十路来て猫に遊ばれ日向ぼこ　きよ子
風ひゆつと障子に孫ののぞき穴　綾子
ぬぎ捨てて姿すつきり枯木立　みや
日向ぼこ「アンパンマン」の好きな児と　栄子

珊瑚の会（浦和）

指揮棒の激しさ胸に冬の星　和葉
荒星や忘るる事の多かりし　かつ子
パオ並ぶ大草原の冬の星　喜恵
矢立初めの碑確と冬柳　マスミ
破れ舟に沿ひたる如く枯柳　水尾昇
凍星や灯台一つ島一つ　恵子
電飾の街のざわめき寒昴　光子
外厠農婦ひそりと冬の星　史代
終電車降り満天の冬の星　広子
枯柳レンガ広場に大道芸　和子
人も風も素通る銀座冬柳　節代
霊山に紛れ込みたる冬の星

誤植訂正

「第十七水明抄」に誤植がありました。お詫びして訂正いたします。

○六三頁
正　秋真昼化・学計算単位モル
誤　秋真昼科・学計算単位モル
「水明一月号」

○目次
正　季節風信
誤　今月のかな女

○六〇頁
正　荒・井倶子
誤　新・井倶子

○八六頁
正　きざきサークル
誤　〃　14・13・時
正　芙蓉句会　山戸美子　048-741-1699
誤　芙蓉句会　山戸美子　048-677-8775

水明通巻1100号･鳥羽谷通巻200号記念

若狭句碑めぐりバスツアー PART Ⅱのご案内(2)

水明創刊85周年の記念事業である「島津城子句碑」建立を契機に催行した「若狭句碑めぐりバスツアー」から６年が経過しました。その後水明創刊90周年・通巻1100号、鳥羽谷通巻200号などの慶事が相次いだことから、多くの会員の皆様から水明ゆかりの地を訪ねる再度のツアー催行を望む声が寄せられています。そこで水明通巻1100号の記念事業として、下記の通り「若狭句碑めぐりバスツアーＰＡＲＴⅡ」を実施することといたします。未だ若狭に行かれたことのない方、この機会に再訪をとお考えの多くの方々のご参加をお待ちしています。爽やかな若狭の初夏を、ご一緒に心ゆくまで楽しみましょう。

［記］

【期　　日】 令和５年５月29日(月)、30日(火)、31日(水)　２泊３日
【交通機関】 大型バス１台
【募集人員】 40名　申込締切　３月31日
【担　　当】 バスツアー実行委員会、事業部
【参 加 費】 65,000円（参加者40名の場合）＊３月号に申込用紙を同封します。
【旅　　程】
①発着地　さいたま市浦和区仲町・「玉蔵院」前
　出発午前７時、帰着午後５時
②ルート　首都高速・東名高速・新東名高速・北陸自動車道
　（復路はこの逆）
③宿泊施設
【第１夜】三方五湖水月湖湖畔「きらら温泉・水月花」
　☎ 0770 － 47 － 1234
　＊翌朝クルーズ船で初夏の三方五湖を巡ります。
【第２夜】御食國（みけつくに）・小浜市内「ホテルせくみ屋」
　☎ 0770 － 52 － 0020
　＊翌朝、小浜お魚センターで海の幸のお買い物を楽しめます。
④観光地　三方五湖……レイククルーズ
　鳥羽公園……「島津城子」「澤本知水･山本嵯迷」「宇田翠保」の句碑
　瓜割公園……「長谷川かな女」「長谷川秋子」「星野紗一・明世」の句碑
　ほか、小浜お魚センター、熊川宿、有名社寺・旧蹟、若狭箸工房など

◆本号以降、順を追って案内を掲載しますので、欠かさずご覧下さい。

主　宰　　山本鬼之介
実行委員長　五明　昇

水明のふる里は若狭

なんで？なんで？　山本鬼之介 解説

なぜ若狭が水明の故郷なの？と、多くの会員に訊かれます。そこで、今回のバス旅行の機会にご説明したいと思います。

[その一]

水明の創刊に発行元となって大尽力した澤本知水、そして、実弟の山本嵯迷（幼少時に山本家の養子になった）が若狭の出身であったこと。二人の実父・澤本常治郎（鬼之介の祖父）は、江戸時代から続いた庄屋であったが、先祖から受け継がれた田畑を売り払い、地方政治家として若狭の興隆に尽くした。

[その二]

昭和二十二年に長谷川かな女が初めて若狭を訪れ、小浜線大鳥羽駅に降り立った時、周囲山なす風光明媚な鳥羽谷の景色に魅了され、「なんて素晴らしい里なのでしょう。東京生まれ東京育ちの私には故郷がありません。若狭を私の故郷にさせてください。」と、思わず言葉を発せられたという。

このような縁で、若狭に水明ゆかりの句碑が七基建立され、若狭水明会と鳥羽谷俳句会の皆様が句碑をしっかり護ってくださっています。いつも感謝感謝の気持ちです。

バス旅行に参加され、ご自分の目で「水明のふる里若狭」の魅力を実感されるとともに、句碑の一基一基に手を触れて句の作者と言葉を交わしてくださることを切望しています。

若狭バスツアーの魅力紹介　青木鶴城

句碑巡り

①鳥羽公園

穴を出て峡の清水をにごすまじ　宇田翠保
山女やく煙入りぬ花しぐれ　澤本知水
沖の石にかざす照葉ぞ山帰来　山本嵯迷
うめのはな吾生涯の友なれや　島津城子

②瓜割名水公園

ねばりひきあろかと田向ふの初蛙　長谷川かな女
犬吠ゆる冬山彦になりたくて　長谷川秋子
渡り鳥消えたるあとの置筏　星野紗一
瓜割の滝に楽あり新松子　星野明世

みどころ

①鳥羽公園

小浜線大鳥羽駅から徒歩一五分ほど場所にあるこじんまりとした公園。山裾の小高い所に水明の創刊と発展に力を注いだ、澤本知水と山本嵯迷の実父である澤本常次郎の功徳碑の他、宇田翠保（故上中町長）の句碑、知水・嵯迷の兄弟句碑、島津城子の句碑が有ります。

②鯖街道　熊川宿

天正十七年（一五八九年）に小浜城主浅野長政が京都と若狭を結ぶ鯖街道の宿場として整備したもので、江戸時代を通じて、鯖街道随一の宿場町として栄えました。一九九六年に重要伝統的建造物群保存地区に認定、また、歴史国道選定地区や郷百選認定地区にも指定されています。

③瓜割の滝（名水百選）

「瓜割の滝」は山あいの岩場から湧き出る清泉で、一年を通して水温が変わらず、夏でも水につけておいた瓜が割れる程冷たい事からその名前が付けられました。瓜割の水は、幾重もの地層が自然のフィルターとなり純度の高いミネラル成分が溶け込んでいます。保存可能期間についても名水百選の中でトップクラスにランクされています。公園内にかな女、秋子、紗一、明世の句碑が有ります。

④椙山明通寺（国宝）

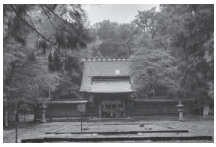
大同元年（八〇六年）征夷大将軍・坂上田村麻呂創建。「文化財の宝庫」と称されるこの若狭地方において、国宝指定の本堂・三重塔をはじめ、重文の仏像など数多くの寺宝を擁する古刹です。福井県の国宝に指定されている構造物はこの二つのみです。また、明通寺は若狭観音霊場三十三カ所の第十四番目の札所です。

⑤鵜の瀬

名水百選に選ばれている鵜の瀬は、毎年三月二日に奈良東大寺二月堂への「お水送り」が行われる所です。神宮寺から山伏姿の行者や白装束の僧侶らを先頭に法螺貝と共に三千人の松明行列が二キロ上流の鵜の瀬に向い竹筒からお香水を遠敷川へ注ぎます。この水は十日をかけて二月堂の「若狭井」に届きます。

⑥若狭彦神社

若狭彦神社は若狭彦神社（上社）と若狭姫神社（二社）に分かれていて、上社は霊亀元年（七一五年）の鎮座です。海幸山幸の神話で名高い彦火火出見尊（ひこほほでみのみこと）を若狭彦神とたたえてまつっています。ここより一・五キロの遠敷（おにゅう）の里に下社あります。



令和５年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

応募資格　季音同人を除く同人・誌友

応 募 句　未発表作品：15 句(表題を付す)

水明集・句会報等「水明誌」及び外部に発表した作品は不可。

締　　切　令和５年２月末日（発行所必着）

応募方法　**水明 12 月号に応募用紙添付**

選考は、新珠賞推選委員による推選結果を参考に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（10 名）

山本鬼之介　網野月を　大村節代
石山かつ子　石井喜恵　井口俊晴
保坂翔太　青木鶴城　日髙道を
曲淵徹雄

新珠賞推選委員（５名）

檜鼻ことは　大橋廸代　茂木和子
椎野美代子　波多野寿子

水明忌のご案内

［日　時］　令和５年２月25日（土）12時　　受付･投句
　　12時45分　開会予定
［会　場］　浦和コミュニティーセンター第13集会室
　　（JR 浦和駅東口前パルコ 10 階）
［投　句］　「春浅し」（「浅き春」「浅春」「春浅き」「春浅く」可）、「当季雑詠」各１句、計２句※受付時にお投句ください。
［参加費］　1,000 円
［申　込］　２月１日㈬より受付け開始、17 日㈮までに申込書（今月号に添付）に会費を添えて発行所総務部宛にお申込みください。

「水明忌」は、長谷川秋子第２代主宰、星野紗一第３代主宰、星野光二第４代主宰の忌を修する日です。日時をご確認の上、奮ってご参加くださいませ。
※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。
※なお、コロナ感染症の状況に拠っては内容等を変更する場合があります。

事業部

春の吟行会のご案内

［日　　時］　令和５年４月４日㈫
［会　　場］　浦和コミュニティーセンター第 13 集会室
　　（JR 浦和駅東口前パルコ 10 階）
［受付開始］　10 時　［投句締切］　12 時（当季嘱目２句）
［開　　会］　13 時
［参 加 費］　1,000 円（お弁当・お茶は各自で持参して下さい。）
　　＊懇親会は行いません。
［申　　込］　３月６日～24 日まで。申込書（３月号に添付）会費を添えて総務部宛にお申込み下さい。
［吟行場所］　調神社、玉蔵院及び別所沼公園等
　　＊吟行地の地図を受付に用意しておりますのでご入用の方はおより下さい。

○大勢の方の参加をお待ちしております。

主担当「りんどう俳句会」　支援「事業部」

風　声

○**現代俳句**十二月号――「永年会員記念作品」欄

夏海へ松は肘張り鳩翔たす　岡野順子

○**現代俳句**十二月号――「現代俳句の風」欄

怒号飛び津波の寄せる冬の闇　岡田宣子

異体字のボトル打ち寄せ冬の海　近藤徹平

遠人の手編みセーター花模様　宮崎チアキ

木枯や誓子旧居に海望む　田寺玲子

○**現代俳句**十二月号――「新入会員記念作品」欄

古地図には広き大川夏はじめ　新井孝麿

春の夜は手酌ぬる燗女歌　〃

あかつきの姉御のほぐす祭髪　森美枝子

草笛や眠りを醒ますワイン蔵　〃

たとふなら海月の骨のやうな嘘　檜鼻ことは

抽斗に仕舞ひし手紙桐の花　〃

竹林に響く尺八半夏雨　千坂平通

青田風山の懐吹き抜くる　〃

熟るるとは澄んでゆくことゆすらうめ　小林京子

満月や白きハイウェイ空に入る　〃

落鮎の迷ひ込みたる三角洲　笹本啓子

魚捌く手元狂はす秋の雷　〃

○**くぢら**（中尾公彦主宰）十二月号――「受贈俳誌美術館」欄

ネクタイの売場ひやかす龍田姫　**鬼之介**

○**草笛**（太田土男代表）十二月号――「受贈誌一詠」欄

中庭の空をあふるる天の川　**鬼之介**

○**好日**（高橋健文主宰）十二月号――「受贈誌御礼」欄

少将といへば「深草」秋螢　**鬼之介**

○**新月**（松田碧霞主宰）十二月号――「現代俳句鑑賞」欄

州浜ゆき氏による水明十月号「古書肆」より鑑賞

古書店の叩きのリズム秋の昼　**鬼之介**

作者のお住まいの浦和は古書店を今も三軒ほど残している。古書店へは曇天か雨の日に浦和へ行ったついでに立ち寄る程度で、最近は古書が減少し、探せない本も多くなった。古書店は間口が狭く奥が長い。ぎっしり天井まで詰まれ、床も一人の幅しかないが、何となく性に合い居心地が良い。作者も古書店の常連であろうか、秋の長雨も終わり、カラリとした秋晴れの店先で、穴倉の様な店奥から出て黴や埃を払い、主の叩きを叩くリズムが楽しい、秋の昼。書籍離れの世情でも貴重な古書は受継がれて行くのだろう。そう期待したいと願う。

○**新月**（松田碧霞主宰）十二月号――「受贈俳誌紹介」欄

古書店の叩きのリズム秋の昼　**鬼之介**

○**太陽**（吉原文音主宰）十二月号――「受贈誌御礼」欄

鬼灯鳴らす古里のなき者同士　**鬼之介**

○**菜の花**（伊藤政美主宰）十二月号――「諸家近詠」欄

鬼灯鳴らす古里のなき者同士　**鬼之介**

○**野火**（菅野孝夫主宰）十二月号――「俳句月評」欄

朝顔の大鉢並ぶ漁師町　田寺玲子

「水明」十月号「季音雪」より

何処にでもありそうな海の町だ。漁師町の朝は早い。漁船はもう出港したが、まだ午前中の早い時間、深閑とした漁

師町には何処にも朝顔が似合う。そんな町にもメインストリートはある。そこには水産物を売る店やコンビニ紛いの雑貨屋がありそうだ。路地を一歩入ると海で働く人たちの住居。ほとんどの家が朝顔を咲かせていると思うと、とても清潔感のある町がイメージできる。朝顔と漁師町の取合せは何とも言えない新鮮な味わいがある。

○**街**（今井聖主宰）――「現代俳句時評」欄
江口瑠里氏による「他の俳誌を読む」から

尺を取る女性テーラー虹立ちぬ　反町　修

身体の至る所にメジャーを当てられて採寸してもらっている作者の緊張と恥ずかしさが伝わってくる。「虹立ちぬ」いいですね。

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

―令和四年十一月三十日現在―

田中章嘉	5口	大塚茂子	10口
福田藤十郎	10口	加藤イツ子	10口
鈴木康世	10口	武田重子	6口
松山清子	10口	笹本啓子	5口
越田栄子	5口	匿名	20口
渋谷きいち	3口		

―合計94口―

特集　俳句による春のさきぶれ
特集　会いたかった俳人、会えなかった俳人
巻頭作品10句
小澤　實・柴田佐知子・中西夕紀
長浜　勤・成川雅夫・波戸岡　旭
深沢暁子・宮谷昌代

俳壇
3月号
2月14日発売
定価900円（税込）
巻頭エッセイ
星野高士
八木健選　滑稽俳壇

四季巡詠33句［第Ⅲ期］…松尾隆信・長嶺千晶
俳人の住む町…蟇目良雨・柴田多鶴子
俳句文法　そこが問題、そこがポイント…井上泰至
自句自戒……奥坂まや
名句のしくみと条件……坂口昌弘
私の本棚・私の一冊……中村和弘
十二か月添削教室……前北かおる

連載
俳句と随想12か月　井上論天・清水和代

本阿弥書店　〒101-0064
東京都千代田区神田猿楽町2-1-8 三恵ビル 電話03（3294）7068 振替00100-5-164430

後記

大寒の名の通り、日本列島は、冷凍庫に入っているような寒さに包まれています。こんな時は熱燗で、風邪を引いたら玉子酒かなと思います。

玉子酒と言えば、昨年の十二月二十八日読売新聞の「四季」欄に星野和葉氏の句が選ばれました。

吟醸酒ちと贅沢に玉子酒

星野和葉句集『永字八法』

選者長谷川櫂氏の評です。

人生を楽しむには、ちょっとした工夫が大事。卵酒は日本酒と卵と砂糖を混ぜ合わせた冬の温かな飲み物。この句は上等な吟醸酒を使って作っているところ。「ちと贅沢に」のあたりにささやかな喜びがにじんでいる。

そして一月七日の朝日新聞「天声人語」欄は、長谷川かな女先生の句を引用し、七草に纏わる行事を紹介しています。天声人語からかな女先生の引用された部分です。どうぞ、ご覧下さい。

俎板の染むまで薺打ちはやす

長谷川かな女

七草粥をつくるために、青汁が出るまでナズナをきざむ必要があるのか。江戸時代に七つの調理道具を使って囃す「薺打ち」の行事があったと知り、疑問が解けた。

七草の日にナズナを水につけて「男女これに指をひたし爪をきる」という。いわば「爪の切り初め」で、邪気を払うと信じられていた。明治、大正、昭和を生きたかな女は、

母の膝のぬくさ今なほ七草爪

の句も残している。

十二月、一月と水明の二人が大新聞に登場したのを誇らしく思いました。

新珠賞の応募締切は二月末です。ご応募の方は、お早目にどうぞ！お待ちしています。

（節代）

今月のはてな？

截金（きりがね） 三尸（さんし） 窘（たしな）む 勇魚（いさな） 吃逆（きつぎゃく・しゃっくり） 喫茶去（きっさこ） 鬱金香（うこんこう） 鬆（す） 編席（あむしろ） 罔象女（みずはのめ） 氷下魚（こまい）

9 頁　15 〃　16 〃　20 〃　23 25 32 50 81

水明発行所受付時間

（048−822−4741）

曜日：（月・火・水・木・金）

時間：12時半〜午後4時半

（土・日・祭日は休み）

水明の行事と重なった時は休み

（上記の時間には係がおりますので、ご用の方は 時間内にお願いします。）

水明

令和五年二月号
通巻一一〇九号
令和五年二月一日発行

発行所　水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四−一〇−二二
電話　048−822−四七四一
ホームページ　「水明俳句会」で検索

誌代　半年分　六、〇〇〇円
一年分　一二、〇〇〇円
同人費（誌代を含む）
一年分　二四、〇〇〇円
季音同人費（誌代を含む）
一年分　三〇、〇〇〇円
振替〇〇一七〇−〇−一九三三九三
発行人　山本鬼之介
印刷所　中央美版

令和５年「水明忌」参加申込書

〈申込締切　２月17日（金）〉

水明忌 ２月25日㈯	会費　￥1,000円	出席します

※「出席します」を〇で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

2023 年 2 月　　日

住所	〒		
氏名		電話	（　　）

（申込書送付先：〒330－0064　さいたま市浦和区岸町4－10－21）
水明俳句会

きりとりせん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音 雪月花

四月号 二月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

題

氏名（俳号）

き・り・と・り・せ・ん

最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

水明集

五月号　二月二十五日締切

都市又は府県名

氏　名（俳　号）

きりとりせん

きりとりせん

山紫集　五月号　二月二十五日締切

二月の兼題「引鴨」（傍題可）

投句対象者　同人及び季音同人「花欄」「月欄」

氏名（俳号）

※最上部の桝から間を開けずに楷書でお書きください。

（注意）この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。
旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

季音抄

山本鬼之介

バスの旅銀杏黄葉の舞ふ街へ　島津初花
膝を抱き虎落笛聴くひとりの夜　鈴木康世
婚の鐘小春の空に鳴り響く　田寺玲子
オルガンの調べやはらか山眠る　十倉和子
彩増やしつつ彼奴の毛糸編んでゐる　永野史代
縁石は砦のごとし暮の街　西山貴美子
父母の影の濃淡白障子　正木萬蝶
神々の恋はおほらか里神楽　梅澤佐江
折鶴の飛び出す小児病棟小春　井上燈女
日の香り潮の香りの蜜柑吸ふ　大場順子
風捉へゆるがぬ飛翔蒼鷹（もろがへり）　丸山マスミ
住み馴れし此処がふるさと松飾る　松井由紀子
島のミサ終へわらはべの手に聖菓　河野はるみ
バラライカ流るる店の狸汁　石田慶子
静寂が時間を止むる冬木道　日高道を
山眠るひととせ包み込む如く　青木鶴城
冬ぬくし母となる胸かがやけり　大塚茂子
大晦日千里を還る五黄のとら　近藤徹平

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内（句に雑誌名、句集名、刊行月を付す）

▼散歩道〈身辺トピック〉

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内（題をつけて）

▼山紫水明〈随筆〉

テーマ…自由

枚　数…二百字詰原稿用紙五枚半以内

水明抄

山本鬼之介

冬の靄湖底にねむる罔象女（みづはのめ）　新暦文

江ノ電のワイパー忙し夕時雨　梅澤輝翠

冬ざれや路地の奥よりサキソフォン　池田珪子

磴百段のぼり切る間の時雨かな　横山君夫

ランナーの追風となれ木枯よ　越田栄子

石庭の余白の妙や冬の空　反町修

珍客のひ孫迎へて小六月　清水桂子

看板は「質屋すぐそこ」一葉忌　渋谷きいち

凩に押され行きつく縄のれん　篠﨑紀子

この橋を渡れば異界雪ばんば　染谷風子

公園に残る酒壜冬の雨　元田亮一

落葉風回転ドアを押す女　小林京子

冬服の隠しに潜む電話メモ　菅原真理

黄落や車椅子押す妻のひと息　阿部幸代

失せ物にかまくる夜や隙間風　丸屋詠子

冬耕を終へし黒土陽とあそぶ　山岸久美子

遠野へとSL「銀河」枯野行く　西幅公子

灯油売ゆつくりと冬を曳きずり来　本橋稀香

水明例会案内

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜（パルコ・10F）	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ㈜（パルコ・10F）	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化㈜	大橋廸代	森本早苗

水明　令和五年二月一日発行　毎月一日発行

（第九十六巻　第二号）　定価　一〇〇〇円